俳諧

李寄詩扇

上

ヘ
4
14
34

ヘ5
4333
1

俳諧

李寄持扇

上

へ 5
4333
1

李寄持扇

大補季持寄扇

附録

白雄坊菊代水

青雲堂梓

へ5
4333
1-2
門 へ5
號 4333
巻 1
355

序

俳諧持扇の序

常ふ便ふ物ふ第一

人ふ第ふ愛敬の様ふ

ふ扇ふ

ふ人情ふ

ふ俳諧ふ

ふ人ふ扇ふ

四時ふ雑ふ

ふ人ふ彼ふ

ふ持扇ふ

ふ冬扇ふ

ふ扇ふ

故々ぬをこて[illegible]ひて考訂し
の考訂を經て要を拾り
をアも成可てより本篇
の章をなりぬあれいはく
吟序凡右ホヤ〳〵さる
そのにて秋ル拾序き所
ホンなるきうを經
丙寅孟夏

蘆明庵五休識

[illegible]

季寿の一小冊ありそ
の編集ものるとをるて
まやくしくし地学の
よりと求しのく〳〵我し
い来書ものを此名をもと
誌ることを省畧り
こうき靴を偏く痒を
掻くの類ハ究る者晴
然とくしんゆきくる
ず是ホのよりを思ふ
此所ものを書拙書雲
岩ハ巻を接末りて
予が師松亭翁く増
補をこふた大人の書

数々の著述ありて取
るべき祝のことく留な
く他さ筆をそどけし
他く我ら代筆をもと
あり孟文道ハ[illegible]
なべ俳諧を[illegible]
まび[illegible]なとハ[illegible]
心呼のいひつけ[illegible]
[illegible]を加へ
初学ちる人のみる見あ
[illegible]をむひとりそるた
心鳴呼の[illegible]びもいん

萬延庚申の仲冬

椿園はあるべきなり

大増補四季の持扇

山金堂主人著
椿園主人補

白雲書屋

春 春ハ蠢ゝ動て生ずる貌春晴
るゝ意なるハあるゝ又春々
張ゝ草木の芽のさかるゝ
ふくらと訓 ○太簇 律 太簇とハ太ハた
の陽氣にて万物ゝ生ずる心あり

○立春 節 大寒の後十五日
斗艮に建あり ○雨水
中 立春の後十五日
斗寅にさしたるあり

正月 ○睦月○孟春○王春月○陬
月○夏正○太郎月○初空月
○霞初月○早緑月○年端月○暮新
月○初春月○祝ひ月○年待月○[illegible]月

元日 元旦 歳旦 日 履端 きの春 げ
ふの春四方の春 空初 月の
ちめ初玉の年 初玉の妻 つの初あ
ゝる年 たち 君ら春 氏の妻

元日賀　今日を賀する始めハ本朝ハ
てハ神武天皇の御宇より始
る唐山にてハ漢の世よりもじめてなり
を行ふ日本より四百年ゝの後のことゝ

四方拜　元日寅の一天主上屬星を拜
唱ハ天地四方の山陵を拜
ゆふて年災をまぬかれ
宅祚をいのりまうさせ給ふ　○星佛　當年
の星の九曜を　御藥を供ず　天子晝
まうるなり　の御坐
より出御成て菜子白散の
御菜を召あがりゆふべ　○屠蘇白散
○度嶂散　屠ハほふる　とゝ　蘇ハよみ
こゝろとよむ邪気をおそ　ゝ
をよみとゝのへまるといへるの理ゝ医家
より多く屠の戸にを加へて屠字を作
る是戸をとざしとよむ字なり
より忌避て戸に書この　ゝ　とゝ
○菜子　大豆六俵を奉る人童女の
いとぐ嫁せざる者より春
めそその後雑菜
まうるもとゝ　○齒固　ハ俵を後
にて向ふ人ハ齒を以て命とする
ゆへ齒の字をよくひと訓齡をこゝ

春　二

もる　○鏡餅　神に供ふる餅を後の
おくに圓ゝ重ゝ重ゝ名
づく　○椒酒　○椒柏酒　○柏葉酒　○椒
觴　○椒盃　○椒盤
山椒にて醸せ酒　元日に
椒ハ則玉衡星の精を服
る人ハ身のくるくるく
走らーむるなり　○桃湯　凡土地
○朝拜　○朝賀　○奏賀　○奏瑞　○小朝拜
元日に群臣天子を拜
元日に群臣ハ朝拜ハ略義
にて殿上にかゝるなり　○院拜
禮　元日に院家の人ゝ院の
御所にあゆ礼あるなり　○元日節
會　宴会ハ天子ハ震殿に
出て群臣に酒を給ふ宴會
事なり宴會に書て
とゝ　○諸司に奏
元日節會の席に右の支
ゝを天子に奏ーなり　○七曜御
曆　曆ハ尋常の
曆を奏ゝ　○氷の採　宮内省
主水司氷を奏を氷室の厚薄寸
法尺石を以てものなりとて奏ゝ

○國栖奏。國栖笛応神天皇芳野へ行幸の時芳野社
輿國栖とのふ処の者をもつて醴酒を奉
る其後毎年年毎年条肉して年魚等の物
をきろ歌をうたひ〳〵今国栖の奏して歌風ひ
る支八ふ一今国栖の奏して歌風ひ
笛ふく芳野よりの
ふうたるもろ〳〵○腹赤の奏腹赤の贄
もろ云絶紫よりの
きる鮒の魚もろ○祇園の削掛元朝
寅の一天祇園の社にて松の木に削掛る
新しきを切て大腸雑煮のなかへ
用ゆるあるもろ洛中洛外の家〳〵
あの火をうけよ条坊の人ねびたる
一説に大晦日の夜ありと○門松
まるもあやまりあるべし
○建松○飾松○飾葉○注連飾○飾
竹○飾縄○飾炭○飾海老
門の神棚在家の妻戸に柳をかま
へて祭る夜を土器に灯
を供へ
祭る○歯朶○裏白○山ごぼう
歯ハ齢ものの祭る
えびくるもむもの齢長くえびをのふる
といふ意にそ是を用るそその上歯朶

を雪におほまたをの物をかこ春の祝ひに用ゆる
草○懸鯛元日に鯛魚一双藁にて
藁を挿こそ竈の上に掛る
あるをこの日鯛〳〵
○恵方棚荻利賓女の神を恵方に祝
ひて鏡餅雑煮を供へ
祭る○元日不開戸江戸の商家元旦
戸を開き一日
戸を閉ぢ
戸を
厳敷もう又俗間家内を掃除せ元旦
年の陽気を取りんとるの儀なり
昆沙門功徳経京の町〳〵駿馬の昆沙門
天の紙符〳〵を夷の簡
を
○若夷若夷の札を
市にて
○夷
廻レ又夷の祝〳〵
偈師のもの〳〵
○大黒舞
悲田寺堂外の乞食の姿
いでなをて門〳〵来り若ふ
○春
駒正月七日の白馬を模一なる紫〳〵
勢を祈上るのもきをとり岩室
鳥追元日より十五日まで田舞の
追ふ祝ふ今の乞丐の婦女

編笠を頂き門に入る事なり○傀儡師 播州西の宮なり
出るなり ○猿曳 漢に猿を担ぎ来る ○大
服 元日ふくべ茶をのむ ○若水 ○色井
水○若水桶○初手水○井花水 ○若餅 今日ある餅つきなる餅
を雑煮に用ゆるなり ○雑煮祝 ○煮を祝ふ
羮は雑く調へるなり即雑煮 ○いもがら 芋
なり ○結昆布 ○大根 ○閑
牛房筧木牛房 牛房は牛蒡の生の牛房なり
筧木のごとく ○閑豆 水煮の豆
なるなり ○太箸
加賀御草 大内にて餅の上に ○蓮葉
ゆく大根をいふ
飾○喰摘○穂俵○椎○搗栗○串
柄○擦○抽柑○柑子○橘
○歯朶○楪○穂長○裏白○兒
布○野老○海老○熨斗○ゆづりは

兩の物 小土器又は杯の物なり ○俵子 海参又は鯉なり
云或は海男なるもの
太郎子の略なり ○小殿原 田作なり
鰯の
夏 ○田作 乾鰯魚なり
田の肥なれば名しなり
押鮎 鮎は異名年魚なり押鮎は塩鮎
なり年始に用ゆる事江海共に
日記なり
○海鼠腸の身 海底にできる海鼠の身
倍の音を
借て祝ふ ○數の子 正字は鰊
多きを祝ふ
祝ふなり ○梅干祝 又梅干は俗宝珠
なり
祝ふ ○門の礼帳 正月門に礼帳を
出し記すなり
唐山 ○上辰の板 高祖の宮中正
月上辰沈迦
出て盥濯 蓬餅を食ひ
以て妖邪をはらふなり ○葩奠賣
昔家内にて葩を
売なり ○年男 年始の
売を毒
売なり ○庭竈 民家産業に業を
なり 竈を居て祝ふ

福藁布　庭に藁を布て物をくゝ藁とも云ふ不淨を祓ふ人多

福口に　福鍋　吉日の粥を炊く時の長名なり又福福の粥を

喰積　蓬莱の餅を菓子を菓子を長寿を

喰んの　○ゆゝ　玉　新年の祝ひ今の人年玉と云ふ歟○羽

子板　○胡鬼板　○ゆゝ羽子　○退ひ羽　○破魔弓　破

矢　○毬打　袖ぎそう　ぶりぐ　毬打ハ厚板を玉のめくちして長柄

○宝引　福引　○弓始

馬乗始　○藏開　○湯殿始　○あ

始　○ひめ始　○ひめ始　○ひめ始　○ひめ始

船乗始　○船玉祭　船に酒饌を供し以船神をまつる

幸木　○幸籠木の小枝を折て魚鳥菜菓を入て竈の上をかざる　○ゆゝ　筑紫に今行なる

ち筑紫　○鬼打木　大晦日の夜門松の新しきを

幸竈　○藁盆子　○三物連歌

三物　俳諧　○三物　俳諧

古の連歌　○裏白連歌　正月四日あり北野の社にて

○三物賣　○去年今歳

御慶年始状　君が春千代の春吉

年　新らしき年　若き年　霄の年

ゆゝ玉の年　○初鶏　元朔の旦元朔の　○初

夢　○宝船敷　大晦日より元旦に乗る

初暦　暦　○試筆　○試毫　○書初

弾初 琴。琵琶。琴。琵琶。三絃。○吹初 簫笛○舞
初 樂田楽 申楽 ○謡初 松柏子○松囃子○松謡 「万春」

樂春 鶯囀 梅が枝 訊ふ 青柳う
なふ 駒い 馬 雇馬 馬乗の ○初商 初麦 買初 ○
帳紙 十日○帳つき ○帳おさめ ○店卸 帳祝 ○歳
且開 俗説の点 名よ 伝処 ○節小袖○節振
舞 初舞 稚舞 ○女礼者○松の内 注連
の内又開 正月 ○初芝居 二日 ○万歳
六日 ○十秋万歳 ○法師 ○三河万才 ○寐積 寐鮑 ○御
降 元日より雨をいふ ○水掛祝 ○水祝 ○水祝 旦年始 ○
男は水をかけ 家内の人に水を掛 永緒の比
松永久秀怪を雷原よめあそ ○懸想文賣 懸想を祈るを注
上 ○懸想文賣 けさくの名あり

桃符 桃板 桃梗 ○神荼鬱壘
是八時門字を建て鬼魅を恐れしむ
呪なり 是も唐山より桃の木れれは 神荼
鬱壘の二神の形を絵に書て元旦
に門に立て鬼を防ぐなり
○画
鶏 貼 葦索画鶏を戸上に結ひ
上に葦索をかけて時を禅し
きめ百鬼
畏るしるふ ○蛟灰飛 立春の日竹を取
とりて灰
こもこ ○春盤 立春の日生菜を食
ふ新を迎ふの意
○綵燕 春燕 立春の日絲を剪
燕よつくり髪を
戴き宜妻の
家を門に結ぶ ○初子日 ○子日の遊 ○子
日の松 ○小松引
○初子の日は松を引く 第一 第二 第三 第四 第五 第六 田
草は子の日に松を引くなり 家内月初子の日に蚕飼
を掃ぐ家を掃ぐ
○初寅 正月初
寅の日
蒲馬へ乗る ○初卯 卯花 卯の日
初卯 松州伝者 初卯の日伝る
寅を用ゆるなり
この日本紀の説へ 未詳也

社内に於て条例の人〻神祇を拝して是を卯の杖と云○卯杖。公家根元に云卯杖と持統天皇三年正月○卯の日大学寮より奏す

二宮氏大饗 二日王卿以下二の宮へ参り礼あり

○朝覲の行幸 二日天子年のはじめ上皇及母后の宮へ行幸なる

○春永。永日。永陽ともいふ祝の意なり

○臨時客 摂政関白の家より大臣以下の公卿を招きて遊びぬふ

宴 公卿より行はれ

陪膳 [illegible]

始 二日高倉大隅の[illegible]

○摩那切

是を行ふ夜よりはじめて

○愛宕天狗

宴 二日愛宕寺の年王かはく[illegible]

西にあり今日夜より入て門前の弦刺

客殿にあつまり各宴飲を

是を天狗の酒もりといふ

○たう樂

三日主上八千猪膏と[illegible]

膏粥を進る[illegible]

○東叡山

大黒湯 三日武蔵東叡山中護国院にて大黒天より正月三日餅を[illegible]

浸 [illegible]

○履新の慶

○かぐみ

履[illegible]

年の[illegible]

開 神お灵前[illegible]

[illegible]

○叙位 五日六日。[illegible]

次第[illegible]

木造始 禁裏の行支[illegible]

○萬歳 [illegible]

万歳

○六日年越 七日八式日[illegible]

白馬節會 七日白馬[illegible]

二十一定

○人日 七日[illegible]

三月[illegible]

馬七日八日

○靈辰 [illegible]

灵灵辰

人日と同

○七日正月 [illegible]

○初若菜 [illegible]

○七種

○せり○なづな○おぎやう○ほとけのざ ○仏の座

○蓴菜摘

齋蒿摘 蕺菜摘 ○菜摘川の

神事 七日なぬかの神事 社の神人氏人の男女多川辺に到り菜を摘む ○笹面の冨

七日今夜法人搗取無面山の餅を ○御

競ひ来て堂上に堂をつくるの事

齋會 大極殿に於て正月八日より十四日

まで七日の間宮殿を修せらる

院の御修法 十四日より 宿直人 ○眞言

院に於て法華経四部を転

○女叙位 八日女官に位階を

授ける

○女王禄 八日女王に

禄を給ふ ○居籠事祭

十日松尾西の京大神宮の祭り村民九日

の夜より家を閉て出ず

○常陸帯の神事 十四日

○外記の政始 吉日を撰む或は九日

○御暦

○縣召の除目 十日外記

を定む

鏡吉 具足淺用元日長吉 ○住

吉の御弓 十三日松尾住吉の社人弓勢

吉の御弓 十三日松尾住吉の社人弓勢

○削花 十四日柳の

枝を切る

蹋歌 十四日 ○男

○十四日年越 市俗の

○削掛

挿 芋俗田舎にて今日餅を製して芋を

[illegible]

○綱引 江戸人

と三井寺門前の人と公取扱よりて左之
別事互に大鯛を引事八月方不敵をふ
ら〜競ひもくみ引鯛ゝ方その年福
潟ゝのふ十三日より十四日の夜まいりて
去る○粔盆 日 松盆 日 爆竹 未邦の俗左義
長 三献おつ 三元地
よはくるもあり○菱葩ほまゝ
爆竹の火まで餅を焼く名ふ是を菱葩
ほまゝとのふをこゝもいふやくと云
字を忌む故
去るいふ事〻○上元 十五日 花燈の夕
唐山の俗上元の日
灯燭をかゝらるゝ○御新木 十五日 百度巻
く義を献りて宴
内省へ納らるゝ○粥の木 十五日粥杖
粥の木也
女の屋をうてば男子をもつ咒ことて
初ことあり女は初ゝと云ゝ杖ゝ代ゝ○粥
柱 粥ふきいふ事○小豆粥祝
十五日紅凋粥枝各紙に十五日八ちかの
せくまあるいはのうちあるべ——
○平岡の御粥 内回恩知ゝ是ゝ祈
おまて粥を麦て田島

の左山をとゝふ
粥とゝいふ○土龍打 うちをゝ
十四日成べし○三保祭 十五日後河関蔓
の社本社を左ゝ南ゝ 彩まう羽車 篠田
町金沢溪の西畔より○獅子頭の神事
十六日保勢国殿金毘山田のまあり蔓ゝ伝
社御ゝ歌を祀り東屋神ゝ
女踏歌 芸十四日の男踏歌のおゝ〜東神
年始の祝詞を作ゝり百ゝ歌をうゝい
詩をうたゝめのふ夫ゝ十六日ゝ
賭弓 十八日より天子弓情ゝ弓を
弱い弦ゝ方ゝ薬ゝ麦ゝ年男ゝ
後大射ゝ餅ゝ
と云○厄神詣 十九日山儀 八幡
射ゝめ入る是
災難を祈ゝ○富の清秡 十九日尼
神をゝ
ゝふ事ゝ神楽ゝ十六年の日部ゝ
宮夜ゝ麦ゝ利ゝ
女節分 十九日是は去
田の夜神迎○骨正月 東大
坂ゝ

新年の初祝ひに必ず鯣の脯を用ゆその魚
背に大豆と酒の糟を入れて麦糖して若柚
ともよぶなり
骨正月と云 ○廿日正月 廿日團子 京の俗是の日
家ごとに赤豆餅を食ふ ○奠
是天穿に做ふものなり ○天穿餅を
繋ぐ 江東の俗正月廿日を天穿といふ紅
縷を以て煎餅を繋ぎ屋上に抑く是を
補天穿と云 ○女人鏡臺祝 此の日に祝ふなとも廿日と初顔と字別
東近きあたりにいはふなり
帝に供へし餅を今日祝ふて喰ふ ○嚴
島祭 しもつき下ノ亥 藝州安藝郡 是嚴島の神と同殊也 ○内宴
廿日仁壽殿にて行はるる文人詩を賦り
詩を作り御前にて講せらるるなり ○御
忌 十九日より廿五日迄 圓光大師の忌日なり
京智恩院をはじめ四ケ寺の本寺其外
同宗の寺院にて別事法會あり ○藪入
俗に無病ありともいふなり
十六日は俗に云ふ藪入は元宿入りの訛りなり 廿日
男女祝の家に到り或は寺社に詣で遊山
参心のまゝに遊ぶ奴婢は主上を
賑をなしまゝにうへるなり ○初天神
廿五日○京北野○大坂天満○江戸
湯島にて参詣群集す ○初不動
廿八日今日諸堂の
不動参詣群集す ○餘寒 ○冴返る○春寒も
同
○殘雪 殘雪は去年より有る
雪 淡雪 淡雪は降てはやく消ゆる
雪をいふ ○のこる氷 春に成てもとけ残る
氷をいふなり
木の芽○若草 ○新草 ○芝の草 ◎萌草
花は白くして ○蘩蔞○蕗の薹
「若菜の一種なり」
瞿子若葉○土筆 一名土筆 つくづくし ○福壽
草 元日に用ゆる故に元日草といふなり ○松の花 ○松の緑
十返りの花 ○藕堀 ○蘖 ひこばへ 艸
の芽 えだのきりくちより出る
のきわのふるき芽をいふ ○下萌 萌出たる草をいふ
すみれ ○菫 菫青の ○鶯菜 かぶら菜の三寸ほど生たるを
いふ ○水菜 水入菜ともいふ京都近辺より出るなり ○野蒜

根堀入　野蘿蔔をほる土の　○田を
中よりほり出し堀入大根と云
鋤く○田かへし○畑かへし○畑打○鍬つかひ
共に田の土をかへす事也（まきかへし）
梅○春告草○香散見草○匂ひ草○いち
あしの字○古くさ　いつれも梅のことく
花の兄　あまたの花よりさきに開けば　好文木　晋の武
いふをもていふ　帝の
事　飛梅　筑紫へとびし梅　未開紅　淡の
古　菅家の配所にあり　紅梅の
寺の梅　鶯宿梅○綸旨梅　鎗梅
の名也○行幸梅
めかれし北梅　西行の歌に　ときめかし　梅さ
いろあらはすやうをもて名を
人をまつのきよくよきとに見るを
とりて名とせり此類猶あるべし　○梅屋鋪
○臥龍梅　武江亀戸にある梅園に一株
の梅樹あり枝條地に接さりて
臥せる龍の如し
よりて此名あり　○梅暦
春のさかり　山中にて梅の咲を
見て其をしる
○子の日の衣　何色もそのほか子
の日にきる
とらふ
○梅の花衣　表白裏蘇枋　十一月より
きさき　表濃紅裏紅梅おなじき

掛かへるを　○鶯袖　鶯の衣　是ハ衣の
うちかけ　色かさねら
色東の袖をいひて衣の　○柳の衣　表白裏青　○
腋縫ざる袖也
櫻衣　表白裏花
桜色なり　○朝鷹　○あさたか　○鶯を
のりこえて山○こえて行○までもあをきを見
徒の…　是ハ鷹の雉子の…
春の…行…
えたるより朝鷹といふ…
といふハ鷹の事也…
ゆへに…
○継尾の鷹
妻を尋ぬ心にて…
鷹の尾を継…
…継尾又白尾ともいふ
佐保姫　春の唐名
をいふ　○鳥さかる　鳥の尾を
…　○猫の妻乞　二月よりある
…
…年越の後より　○白魚　異名あり
…　鱠残魚ともいふ
飯蛸　異名鱆魚ともいふ
二月の内多くあるなり　○蜆○淺蜊

山笑ふ 万山春色を佳きを云 ○雪氷解る

【兼三春物】佐保姫 春の神山をさかのぼる神ゝ神祇よ同じく

霞 ○初霞○八重霞○霞の網○霞の海○霞の沖○霞の浪○霞の袖○霞の衾○霞の谷 「春の玉姫」といふ 霞を「霞の洞」仙洞 仙

世中九の霞 仙境をいふ 「霞の命」仙人霞を服して命を延るものなれば長き命ともよせていふ 「霞む」

「流るゝ霞」共よ深きをいふなり ○「春のなごし」契沖

春のなごしといふ ○長閑「麗うらく」

霞たいふく

もつぱら長閑なりと云 ○暖 ぬくし ○水温 ○鶯

経信を又「人来鳥」とゝめる「金衣」

春告鳥

鳥「歌よむ鳥」以上鶯の異名なり ○鶯の琴

鶯笛 ちとよ用ゆる ○鳥囀る ○あをる さへづる

○百千鳥 多くの鳥をいふ ○鸎 形鶯より大きく其むなの声琴を弾するに似たり

故に佳ものを喚び唯暮雨をよぶなり ○

駒鳥 頸を振りて形鶏の走るに似たり故に名く ○雲雀「揚」

ひばり 雲雀の異名 ○干鱈 ○永き日 ○

遅き日 ○雪解 雪とけ ○風光る ○

東風 ○海雲 海蘊とも書く其の形乱れたる糸のごとし

白藻 ○水松 ○若布 ○鹿尾菜

○鹿角草 ○六味菜 ○ひじき ○海苔 ○鶏冠のり

岡中よ生ずる草なり

星○於胡のり○さくら海苔○青のり○索麺のり○紫のり○出雲のり○奥津のり○品川のり○浅草のり○松のり

葛西のり ○相良布 ○柳 楊とも云○芽め

青柳○糸柳○枝垂柳○柳の眉○柳の髪○

柳の糸○玉柳○風見草○

根取草○風名草

門の柳 陶淵明が古事あり

○春まで

折柳　旅立留別　○椿　玉椿　椿葉　椿花　椿実
の列こ椿　長くかさなる椿を云　○陽炎糸遊
こがらしふかぬ一日も　東遊八夫多多みり　○苣　唐苣　川苣　○芹
○根白州　田芹　三月葉芹　四月末より苗生して二
月専　○菠薐菜　四月十種の物を使ふ　○赤根州　○
穀精草　の内田の中に生ず　○三月
独活　○茲姑　烏芋　○摘草　雑菜　ほこむ
山葵　山中の水近き　○木地の爐縁　春
陽乾　二月庚申の日　○春の夜
春宮　東宮を　○朧月　○春雨楡
英雨　○紙鳶　紙老鶴　風中共
風筝　紙老鶴　風中共　よりて　○春の夜
○朧夜　○春の朝　春のあけぼの
○春北夕　○春興　春の興　○春望
○春山春野　○春郊　春の野　○春
の海　○春の川
川に梅桜の水よりつるふ　或は花
の散りかゝるを清て水すくひ　体
どをうつくし　○雙調　春の調子　春も
よりめつき　万物を生ずる
生長　木芽　○襃
ぬる時妻は夫の洞て　裏も　葉出
美の花の句　○移栽　四月後
を上時　載る
得てよく生活する形　○春ふかぬうぐひす
春ぢめ　春ちめ　春ちめ　春ちめ

○春ハあけてハ春に向てあり春へこなたせ
ハ春方向てなり万葉集中に出る春ま
けてハ方の字を書
せるあり

二月 夾鐘 律 夾鐘ハ律の名也夾ハ佐字甲也百の物に佐ハ出

濯でまくの ○驚蟄 節 雨水の後十五日
蟄虫をおこす 斗甲に建をいふ
春分 中 驚蟄の後十五日斗卯に建を
いふ九十日のまんなかなる故にいふ
○仲春○令月○如月○梅見月○陽中
○小草生月○初花月○雪消月○衣更着

中和節 朔日唐の徳宗の時上巳九日に加へて三節とす ○献生子
唐山民間の者青き袋に百穀瓜果の種
をもりて相共におくりて祝ふこれを
献生子といふとを ○二日灸 二月二日男女灸点
も医者に八月二日針
灸をすゑるとしきを慎みて ○初午 稲荷
此の月二日を用ゆるなるの也
京之山城伏見の稲荷を
始として諸国に是を祀る ○水間祭 上ノ午
泉州竜泉山水間寺聖武の勅願行基
天平年中の開基なり本尊正観音行基

罪二氏の作今日出をもちふ者厄難
を消除福寿を得るとなり ○東
福寺懺法 十五日東山東福寺にて懺法の法
南にあり懺法とハ天台大師
或説ニ従て行ひ給ひし時に
六根の罪を懺悔するの法也 ○本妙寺
参 上ノ午江戸三上山の辺に旧跡あり今も二
月初午詣あり此寺山門に備りて
天台宗なり今ハ八寺
院結よりそぐ ○釈奠 和州轟き
まつりと
いふ孔子并十哲の影像を
祀る二月八月にあり ○春日祭
上ノ申和州添上郡 ○摩耶参 仏母摩耶
春日の祭にあり
山城利天上寺ハ摂泉兜率釈迦の高精の山
上にあり二月初午の日に飼馬の無難を
祈るとて馬をひきて献せ主奉の昆布
を買て帰るを見ると昆布とて ○
吉野の餅配 朔日花供懺法の者行人
本堂へ出て御供を事配し
広庭にて餅
をまく事ある ○薪の能 芝能なる二月
七日より十四日迄
続き事多きむとらふ奥坊
具官等の内あるまて ○二月堂の行

新日より十四日まで南都東大寺にて
半夏加持の仏法上七日八講讃嘆者下七日
出願者まで勤る儀を
出家の僧に
伊勢の井に
いふ若日の井を取て
○事
納八日井供者
○祈年祭四月中旬
○園韓両神祭
上七社両神とも宮内省より祀る
神なり本荒神といふ
○行基忌
津の国昆陽川辺郡にあり行基建之
池を一昭の財あり
○祇園御八講
○社日
○列見
十日公位以下の
式部名部の三者あつまりて上
○氷取二月中の
○

○湯島天神砂餅十日江戸湯島
天満宮別当
喜見院より
○比良の八講近江の
○涅槃會
十五日
○花朝
節十五日百花
○治聾酒社日酒を飲
○雪の果毎年
○西行忌十五日西行法師
○餅花煎十五日
○嵯峨の柱炬十五日今夜清涼殿
遷書
○餅

花を炉へ挿きて涅槃会 十六日 ○積塔 十六日 ○光
孝天皇の御子雨夜の皇子八百人を供養
せらるゝ由ひしり記十七日八雨夜の皇子ましまし忌
日なり○廿日検校以下の僧俗家萬会
緩の小路に聚尾に集り積塔会を修せ
○貝寄 摂州難波の海辺にて毎月廿日
お後に彼れを見る也ふ
ゆへ溪へ沙を出せて貝を拾ひて聖霊
会供養の造り花をまつりて上宮太
子のおん供と云 ○踊念佛 初のゝ中日四天王
寺念仏堂にて
○聖霊會 廿二日摂州四天王寺 ○浅
草寺 廿二日摂州四天王寺の
聞祭 廿二日 九年中の紫宸殿朝義を摸し
八十三度あり 今名目のみ残せ
る事の日花奉献公家より出て祭事 ○
北野御忌 廿五日○菜種の供養 今夜
大小の御供を供ず 西京御供田を飾る家
往来 ○吉祥院の講
廿五日○二月廿八日八天満天神の神あり
る事日見る多の粉あり て後鳥羽院天

仁二年より吉祥院まで八講あり
菅家の御忌なり 道明
寺祭 廿日河内国志紀郡土師村にあり
一名土師寺といふ中興住持の尼
覚素尼菅公相の位牌寺 ○亀戸天
以て菅公を安置せり
神花踊 廿日○江戸亀戸村にあり
廿日花踊を修せ 祭神
事あり ○季の御讀經 二八の月大祭
清涼殿 ○時宗踊念佛 初のゝ日○長崎
るゝ 西京時宗踊念佛
○彼岸 春秋二度あり七
日の間あり 初のゝ
廿四日を佛氏号て中日
といひ八日を
○四月 ○茅代 ○茅代 二月 安産
○四月 ○茅代 ○茅代
○水口祭 早苗水掛の口を祭り
○種井 ○種井 ○種井
○藍麻時 上巳麻仁を五
穀の中に加ふ月

今は食麻と
ある是なり○蕨○早蕨○遠蕨○
蕨を○異名を紫
の茎と
いふ
山根草 花王抄に
○蒲公
○異名 僕公 蒲公丁 ○杉菜 杉の
○和名 つぐ つぐ
葉を
別にもきもあり
○狗脊 ○大蕨草の形ち脊骨の如く
○杓把 本草曰杓把春青清
子 夏杓把蕨と
と
○連翹 ○韮
○五加木 異名を
文章
○虎
杖 一名さるつやくい
又古名きたびとこ
蒜 胡葱 野蒜 ○水葱摘 一名
蘭
菜○三才圖會に
高○沢桔梗○水葱
同名別種あり
○蘇花 異名

花の蕊の
○菜の花 ○草の
草 蕊は黄色の蕊を結ぶ州と
○大根花 ○蠶
若葉 ○赤黒の薄
○草の
○萩の燒原 ○蕨の
赤黒 ○草芳 ○角組芦 角。
芦の
鍋
○蓬摘 三月三日に
伊勢山よ
○接骨木の花 ○銀杏の花
○若紫 ○紅梅
○八重梅 ○梅梅
○彼
岸櫻 ○山櫻
○糸櫻

櫻ようの木なり○一重櫻○蛯さくら花多く葉ちさく故よ名づく○熊谷櫻花の躰しとふんあり波岩櫻よ也えまて八重の花ひらくと○鬼さくら山さくらの一種なり又ふさまさくらの類也別種なりとなり○犬櫻櫻ようの花ひらくと犬といひ鳥といふまべて世そ非なるもの也犬櫻ふさくらと大櫻ふさくらと鳥飛鳥あやきの類花ふ○椿白玉椿飛入椿二階椿○初花○いう椿○いう椿椿

花を待○接木接種春分の後を待とも○初雷初電東方より雷声を聚し秋分の雷声を收む

○菊の若葉○鳶の若葉○芳宜の若葉○果鳥○かやのなるこうはなる花いふ故なり花一名○雉雉雄雌の名を雉と云ふ故よ鳥祖雉を伝へ云ふ故に雉子鳴て秋○燕春て秋社に来る○島の巣古巣○帰雁○うすの子○いわつの子○小雁ゆとの子○の別○子の名称○引鶴引鴨時鳥の名称同じ冬鳥なり夏多くおつり居さる示とり○松毛菊いとの葉の蘚と食ふと云○孕雀○雀の雛○孕鹿九月より一年の間角解といふ○赤ちゃそ

鹿の角落角解といふ三年まてその角のおのづからく落るなり○蚕○蜂○蜂脾蜜八夏巣のうち不貯冬の蜜の食物○蝶知名加波比良古○胡蝶○蝶○黄蝶

鳳車好て花の香を吸ふ様之舞を以て車交尾ふ以て鳳車と云ふ

胡蝶の夢○馬刀○蛍形鱶以て車交尾ふ粉退くとい

○寄居虫形鱶似て

蝶の売買ふ蛸

○蜷○河貝子蝶蛸蛸

蛸八倍字なり

やどろの貝なり

御簾小付る總角の結びなるかくちの

○故小肥後紙後の倍ハアケマキとふ

○諸子魚 三才圖會ふい文字不詳とあり ○鮡の子取 東医宝鑑に青魚○カトコ ○蒸鱈 ○田螺 ○田螺鳴く ○亀鳴 亀も田螺も月のあかきを恋ふ ○蛙 異名と丁子蟹○石蜂と云又形大なるものを蟾蜍と云 ○青蛙 ○青蛙 ○蛙子 名と蚪斗 ○無声の蛙 江戸小石川伝通院の蛙名高し 昆虫門に蛙の妨と上人草字の妨とあり ○山の蛙を封じ給めひしゝ ○河鹿 云山川清流の中 ○蛙黽 本草云蛙眼莫狀交 和名阿未加閑流 ○宅原蛙 ○蛙 ○穴を出る ○出代 昔は二月三日奴婢の出代りなり今は三月五日九月十日なり

三月 ○姑洗 姑洗は姑は古洗は洗なり ○清明 節 春分の後十五日斗

穀雨 中 清明の後十五日斗 ○春暮 ○竹秋 ○宿月 ○如月 ○中姑 ○春 ○春月 ○蠶月 ○麗月 ○春惜月 ○花見月 ○桜月 ○弥生 ○春晩 ○春尾 ○春晩 ○経供養 二日 桜四天王寺 本堂如意輪観音 ○寒食 冬至より一百五日 ○甚雨 ○重三 ○上巳 ○上巳 ○三月 ○上除 ○巳の日乃桜 水辺の桜 ○須磨の桜 ○酒 御酒 古草 ○草の餅 ○蓬餅 ○蓬餅 ○鏤人 唐の時三月鏤人 ○雛遊 ○雛祭 ○雛人形の類

雛作○雛市○雛人形○雛祭○雛桃○青き踏 三月三日踏青蹴鞠を

上巳 三月唐の俗上巳に遊宴を云○油花 洛陽の婦女蔬の葉を油に

燃やす○曲水の會 水流に盃を浮べ三月○巳

宇治水 曲水の形巳の字に朗詠を出す○御

燈 三月○天子北斗

燈 三月○柳の鬘 三月上巳女児は紙

桃 桃を髪に挿む○土佐の海硯石取 三月山別

粟津祭 三月江列島川

海潮 乾くを日

住吉汐干祭 潮中の

○蛤ふる 蛤を取

○石山祭 三月江列石光山寺の

○潮干 三月今日

○一乗寺祭 五月八天王の社洛北の一乗寺

○石清水祭

山城の石男山八幡宮天祿三年

三月八日 八日の祭あり南都を称す○水尾

祭 九月丹波國栗田郡愛宕山の

○吉野

會式 十日大和國吉野山子守権清盛天皇と云

の神輿本堂に渡御し花舞と

云花伝手法を以て手法寺と云

昔西安寺中国覚上人の寺に住し

融通念佛を修し今は花の十四日より廿

四日を念仏あり其間土人能を

狂言を云 京八の時を

○嵯峨念佛 九日

○稲

荷の御出 二年御出二卯還興本山 稲荷

を経て九条の

暮に入る○千本念佛 朱雀通り

南引接寺の園

○比良祭 十日比良比

良村の祭

神輿二基山王十禅師

飛梅天神南社あり○梅若祭 十五日

木母寺大念佛會 同日武州隅田川梅柳山隅田院木母寺にて行ふ ○勧学會 十五日○三月九月五度 真林寺月輪院にて行ふ天台の大学院義を講ず紀典の儒者も詩聯句をまじ

○淺草祭 十八日○浅草市場 寺境内三社権現のまつり

○人磨忌 十八日いまの八合目官家御新供を修せと之今よりて初穂流去の日を以て歌會を設ず ○御身拭 晩清涼寺の本尊釈迦如来今日開帳あり寺僧白巾を以て仏像を拭ひ拭ひ拭ふ拭ふ拭といふ

○池上千部 十九日より廿八日まで○長栄山本門寺 [illegible] 諸々地上持 まて法華經千部 新千口の淺酒あり日蓮宗 ○御影供 廿一日 沿岸近辺の大寺すべて弘法大師の御影供を仏寺の外 ○永代真言宗の寺院まで修法を修せ

寺山閉 廿日弘法大師の御影供を修せ [illegible] 富岡八幡宮の別當大業山永代寺 [illegible] 月世日弘法大師の御影供を修せ [illegible] 永代寺の庭を [illegible]

山開 [illegible] 園中 ○爐閉 晦日○茶人の炉 [illegible] 陽の法十月より今月晦日限り ○順峯入 [illegible] 春大峯山上まつりを順の峯といふ本尊は聖護院宮 [illegible] 天台宗 ○小弓引 [illegible] 地下の人の [illegible] ○杏の粥○

東の饌○田鼠化鶉と成○萍生

○初花 ○花ざかり ○花見 ○花衣 ○花の彩 ○花の肌 ○花の恥 ○花の唇 ○花の曙 ○花の戸 ○花の [illegible] ○花あさ ○花ぞう ○花の宿 ○花の扉 ○花ちり ○花の [illegible] ○花の [illegible] ○花の [illegible] ○花の [illegible] ○花の [illegible] ○心の花 ○詞の花 ○花の神 ○花の [illegible] ○花桶 ○花へ ○花見車 ○花車 ○花筏 ○花結び ○花筒 ○花瓶 ○花笠 ○花蕚 ○花の宴 ○花の都 ○花洛 ○花くし ○花のあるじ ○花ぞう ○花圃 ○花の檀 ○花の雨 ○花の錦 ○花も暮 ○花のつぼ ○花の鏡 ○護花鈴 ○花軍 花の爭ひ 咲くをいふ

○花皿 仏に供ずる花を盛る器。○花雪 花籠のまの転ぶ。

吹花 花を吹きちらすこと。○花園 宇治の花園（後撰）。○花

まひふ ―よ 花まひふ。いふおもも。○花の縁

一説に花の蹴の

後ろもやしこ。○花細 花をおもふ。

法の花 雨花 智恵の花 是八皆

○桜。

落花 飛花 惜花 残花 ある花を

いふ。○櫻 山さくら。○桜。ふ桜。

つ桜。○雲井の桜。滝桜

○桜の桜。南殿のさくら。朱桜。禅桜

○桜戸。糸桜。遅桜。浦美さくら。氣

さくら。○花桜。○八重櫻 山中の歌に金桜八重

ものの八重山中に

普賢像 葉の間に花の咲る桜と

きぐ花に葉と葉と茂と訓

巴ひとの名づく。「楊貴妃」 奥福寺の

愛日 ―ひ 僧玄宗ゲ

名とも。 墨染櫻 遍照寺より「雲

珠櫻 珠に似る。○馬。唐鞍の雲 虎の尾 八重

條屈曲花の蕚 花蕚 ○枝

花の後りに近き

ある名づく。 江戸櫻 花大端

蕚長くて

塩竈 蕚に桜

金玉櫻 一名真愛忘さくらといふ江

戸俗名八重の社物

佐谷金玉桜

雲ありとぞ。 右衛門櫻 持延寺

師堂のまへ

桜を愛せ

花木を

○俗佐民物語の「歌仙櫻

井の傳る歌一名大般若桜といふ。 櫻狩

秋色櫻 東叡山清水

堂のうちの

桜を植て

紅葉狩又同 ―― 櫻田 櫻人手

鞠櫻 花枝上に

人丸櫻 夢

見草「曙草」。夫木抄。二日ぐさ。「俤名草」以上さくらの異名あり○桃の花。桃。一歳桃。油桃。姫桃。毛桃又異名を三千世草「碧桃」白桃「源平御濯古草」といふ

桃。俗名桃又日桃「西王母」八重咲。大福寿寿金紙桃。俗名星桃「緋桃」八重咲。源氏○海棠。睡花

○薔薇の花。茨花本邦にもあり。唐の方もあり○李花。異名。東苑。道傍。智名。うちさを○杏の花。異名甜梅○林檎花。異名を頻婆果○櫻桃の花○楔花。文林郎といふ

花梅。一名○石榴花。唐人の詩にあり。葉小。沉丁花。瑞香。春。○梨

○沉丁花。瑞香。春。はて能法也

の花。あづの実の花。葉新。○木瓜の花○楊

梅の花○菊蒲の花。異名草龍珠。○

束花。大小。種あり○木蓮花。蘭○胡

桃花○辛夷。こぶし○馬酔木の

花○長春。日月紀。園雪紀。「科斗後」花。一名長春の名あり

○躑躅。山つゝじ。鮮つゝじの名つゝじ。蓮花つゝじ。浅黄つゝじ。紫の山つゝじ。琴つゝじ。姫つゝじ。源平つゝじ。小式部つゝじ。南山つゝじ。鬼つゝじ。ぎつゝじ

「いろつゝじ」紀花「平戸躑躅」「段だらつゝじ」平戸つゝじ。或琉球つゝじ。もつゝじ。黒つゝじ。ぎつゝじ。上賀茂の南の上に檀といふ名あり神事場あり。赤紫鮮「火取草」つゝじの異名也

蓮花の四種ありの名あり

「羊躑躅」吉野に多し。遠くから花黄あり○映

蓮花のおゝ花黄あり

山紅。葉少し。直く花赤。又小映山あり○花開く左ちげ。或白花の物あり

藤の花。夏頃。花房。夏の九。夏藤。夏葛

○令法 葉の形桑のごとくもとより五種
ありて凶年は飯に交て喰ふ
ことなる ○通草の花 蔓草之花
ものとなり 紫或ハ白
きもあり 鞍馬の木 ○小粉團の花
の芽漢ハらまき之
花の形粉団花は ○茶蘼花。
円くして小さし
白山吹「いもふにる草 万葉集より
面影草 ありふぶさ
の名 ○糯花 俗にこまを
名之 小米桜と云 ○春
菊 ○高麗菊まさ ○東菊 花菊ニ似
茼蒿ともいふ
て淡紫 ○櫻草 ○旌節草
きなり
○九輪草○七重草 ○仙臺萩
桜草に似て花大に
葉は似て花黄之 ○華鬘草
苜蓿とふ花之
花の形ケマンを ○馬蘭 葉長サ
てらるに似たり 二三尺
幅二三分花六瓣淡紫 ○碎米
薺こあやめに似たり

瓣 蓮華花○五形ともかく ○母子草
俗にけんげ花といふ
○鼠麹草 花の形白ヌを
○仏耳草 ○白茅 穂を列ねるが
ごとし根を
茅蘭根と云 ○茭の花。雞頭○雁
頭○水蕣
園にそだてより大 ○眉作花。薊
きく花むらさきと ○魁
あきこ花の形ち眉排に似る
此名づく一説に鬼薊とする ○莫
人草 ○虞美人○應春○錦被
けしれるびなに似てちさし ○
海金沙 ○かなぐさ○かなづるつかるづる
○いとかづら○さるかづら天和
まて三味線つるといふ宿根より生
ずるかづら葉くきつよし
海老根 ○化倫草 本名岸波良 ○丁子草
葉折に似て花丁子
のごとし淺黄色之 ○蘋枋の花
○紫荊花赤色を ○金盞花 長
染る木とハ別なり
春菊といふ花金紅色大サ
指頭の如く形盞子に似たり ○化

偷草○堇（靈菫○草の形墨中小似たれバ和訓墨）
ぺの○槙槽の花○木李○木梨
（花淡紅色）
外國の花桐○櫻花○青麥
こハ異なり
菊の植替（清明穀雨の間）○梅の若
葉（新小生）○秦椒若葉（山椒）
めめ○若蔣○蘘荷○栁
の薹○萍生そむる○三
月蘿蔔（楊花蘆藤春日繁食ふ花淡紫なり）
茶摘（茶と採の時分早き物ハ味全くなら遅き時ハ神
散ず穀雨の前五日を以上とし
後五日こまを次く後ハ湯て
なるを上とし日中よりとかく
も雨中ハ採ハよろしからず○
手始（月朔日或ハ三日）○利茶

○唄秀（白）
桑（青葉）○青葉○弥生山
名所ハ
あらず○綿時（八十八夜を五六
日見うけてまく
を上時とし八十八夜過ぬ）○種植
時とし時とまてをくく
移載（苗の草木を
移しうつしもるく
喚子鳥（古今二季の鳥なるべむつ
く深山より啼て物
淋しきなる心地に）○麥づく引
殘る雀（二月より引くる雀の
此月まて殘り居る）○雲
小入鳥（鳥巣ゝ鳥帰も
同一事なく雀雁鴨及も
ろくの名古巣）○鶺鴒（和朝
ふゆ去の口なり）
し渡り名之背より）○櫻魚櫻鮭
紫ゝ交る羽あり）
櫻貝（櫻鯛）（是ハいつまも拵の
ゆゑの
名なり）○柳鮠（肥柳の葉より似
るゆゑ名つく又

時の景物を賞美の刻ともいふ ○柳鰈俗ニ牛の舌ともいふ

魚之○小鯈○若鮎○鮎汲○蜑

○蚕飼○菜呑○柳葉の魚

○蚕棚○飼屋○新来摘○上

梁梁ハ魚をとるもの具之上り梁ハ鮎の上るを通ずして取る之

鷹の巣○杜鵑の巣○老の

○鳥の巣

鶯○目ぐるる時 眠を催す ○

忘霜 別霜 ○八十八夜 立春の節

より八十八日めをいふ 俗説に名残の霜と云 ○櫻衣

表白裡青又表白裡蒲 山吹衣

菊染或ハ表白裡赤花

又花山吹表 裏山吹表黄裡黄

朽葉裏黄 又表青裡

黄 青山吹 同上 つし衣 表躑躅 裏青打

又つしの下重ハ表藤 裏赤

打又もちろ〳〵表紫裏紅岩〳〵

表紅裏紫白〳〵

表紅裡むらさきあり ○女服 白てん

てめんの類ハ水山吹 櫻川 ハ

ふて も暮ゆく春の模 抜金銀箔を

以て ぬきこむと 間 ぬきあ て 俳倫

子 俳 縮緬の類をかいどりよもる

又もこ色ハ桃の花よりもやうれこち

ゆけしもちゆるゝもやうハありとも

比屋ゐを上ぬ小もぐ〳〵 見

上つゝきの式ハ四民見まち ○行

春 ○暮春 ○夏近き ○春のかぎり

○春の暮 ○春を惜む ○春の港

○春の別 ○三月盡 晦日をいふ 一日

ゆく〳〵

まちぐ有べ〳〵

夏 夏ハ假なり万物を寛段して便生

長をるくまつハあつ之あつ之通

ぬ夏ハ

あつ〳〵 ○仲呂 陽 仲呂ハ陽散ド

〳〵て中ほあり旅陽功 外ほあり陰実ホ

をなを故ほ仲呂と云 ○立夏 陽 穀雨

の後十五日半 ○小満 陽 立夏の後十五

日半已ほ長ク

四月

○首夏○孟夏○初夏○跳躍○卯月○卯の月○余月○正陽月○乾月○巳月○花残り月○得多羽月○このてくら月

更衣 朝日 ○白襲 白重ともいふ○四月朝日より袷を用ふ昔冬は下小神を表は白裏は白うすもえぎ○卯の花

衣表白裏青 ○袷○綿移○夏羽織

下ヶ帯 六月五日より女房上下かくひらを色〻に染て附帯く是は閑中のたすく凡俗も地白〻ひらを下ヶ帯を用ゆ又四月朝日より山下帯を用ゆ○青簾 朝日○青簾○簾とも云ふ

翡翠の簾 野〻井竜ゆき簾と云ふ又山の翠をいふ

孟夏の旬 夏冬季のあらゆる始る時下に酒を賜ひ改元ありて食べ旬とは皇の政を称し給ふなり ○篠ノ祭

近江國坂田郡筑摩の庄筑摩の社祭祀は四月朝日とも或は初の午とも云ふ

祭る所伊勢陣の神なり ○氷を供ず 四月朝日より始り て九月晦日に尽こと 主水司よりもまるなり ○住吉卯の祭 初下○摂州住吉の祭之祭の日神主孫冠を各卯杖を持ゆきんを也 ○大神祭 上卯の大和玉城也 郡祭神大巳貴の神にして三輪明神之大神と八大之神の神にて大物主の社 ○稲荷祭 中卯山城伏見紀伊郡 四月卯の日二ツあれ八初の卯を用ふと ○山科祭 上辰○勧修寺の南の境内往昔張像の水の辺にある社をいふ也 醍醐帝の外祖宮藤氏夫婦の昊社はて勧修寺の祖なり ○八瀬の祭 上辰○八王子天満宮の祭〻天満宮の社八山城愛宕郡矢背の里にあり ○平野祭 今絶 うら祭の社五里之ふ 祭天社の西にあり ○江州八幡祭

中ノ卯。法花ノ峯ハ幡宮ハ海國播生郡ハ幡村ヨリあり祭る神名情水ヨ同ー○多賀祭近江國犬上郡多賀ノ例年四月二の午或ハ上の巳日ニ云ク○堅田祭上ノ酉山城國堅田郡祭る神大山飛上巳○松尾祭上ノ酉。大和の神ニ又一説市杵島姫ニも云ヘ○當麻祭上申。大和国禅林寺世俗当麻ニ号ス用明帝オ四の皇子麻呂子創むる所ニ云ヘ

當宗祭上ノ酉。河内国志紀郡当宗の社ハ仁和四年四月始て勅請ス○梅宮祭上申。この祭今ハ絶ス上人僧ニ見を祭るのミ云ヘハ橘氏の祖廟ナリて世俗姫の婦女當社の砂を乞て宝珠ニ佩とり云ヘ○大津祭宮の神社ハ江州大津四の宮ニあり祭る神小日枝大日孁尊ハ小彦ハ小彦ハ

山崎日の使三日。日の使ハ八幡宮オ一の社ニ

治承三年迄狩勅使の祭あり○水屋祓四日五日ニ当日ニ南都水屋川の南ニ水屋の社あり祭る神三尊素盞嗚尊稲田姫ニ奉の日申ノ刻あり北人屋結を施せ云ヘ○廣瀬竜田祭四日この社ハ大和国ニあり祭の日廢務之事ハ二度行ハる使ハ祭の日ニ云ヘ大忌風神の祭ニ云ヘ○擬階の姿七日。准々ニ加階ス云ヘ儀ニ云ヘ○灌佛八日。給仏。仏生会。高華仏産湯。甘水。五香水元今日諸仏会を修ス諸品の茶を以て小堂ニ飾りその中ニ小さき釈迦像を安置ー云ヘ○賀茂の祭中の酉但シ二ツあ申ハ上ノ酉。葵祭。陰暦の日。葵ノ花。葵ノ葉。葵ノ根の日ニ云ヘて六府を始メ一般ニ云ヘ

を作を当日の使ハ近衛の中将ニ云ヘ○戒檀堂開

帳 八日。江州比叡山よりは法人来
清き女人常ハ叡山よりくること
を法さるも今日ハ許して東坂下花
橋の社より詣でゝ灯明を点橋と云

花摘 茶の日一信教の母妙
徳婦人を祭さとゝ

山崎祭 八日。山城石離宮八幡の
傳よりあり大山崎の爺々

地主祭 九日。清水地主権現の堂
にて神楽午刻還幸まり
その後獅子舞田楽ホ ○練供養
舞踊まり康富記ようゆ
十二日より十四日まで大和石当麻
にて法会を修して十四日練供養
ありこれ中日
姫の忌日あり ○千團子 十六日 江州三
井寺の鬼子母神へ七日詣人来詣す
この神一年の子あるを以て来る一
子を供ま
ゝしらあり ○日光祭 十七日。十六日例幣使
賀州日光山へ
来向拝礼之 ○和哥祭 十七日。紀州和
哥山よりあり東照宮の祭
名之一名雑賀祭とも云 ○霊厳

寺千部 朝日より十日迄。江戸
深川乃本山真厳寺より
て修
ま ○浄心寺千部 十九日から
廿八日迄
○法苑山浄心寺ハ真厳寺の東南
一町ばかりよりあり日蓮宗深川才一
の大寺と毎年十日の間
法華千部の読経あり ○高野
花供 廿一日。高野山室亀院の
住持代ゝ
ひそかに色衣を大師よ
なる光を恐供ゝ ○山
王祭 中ノ日但二ツあれハ二番目近
江の石日枝の神社ハ滋賀
の郡坂本にあり
なる神大巳貴之
ま一名をさゝ一郎
ま、重ようなる ○神祭 此月
祓ず
祓行排ぎ
さるゝ ○榊取 榊さを。是
皆祭の祭也
三枝祭 大和国添上郡平川村
の祭社の多く吉日を擬
むよし拾
芥抄より出 ○吉田祭 中の子吉田
の春日ハ中

納言山蔭々の建立なり ○駒牽 廿七日廿八日のうち是ハ
四月よりあること也八月もうまれり ○矢
名ハ因しなきも心ハうまれ 洛東三十三間堂蓮華王院を
數 江池中杜若を壮観しまた凡
この矢の矢数毎年四五月永日の
のうち晴天を候て作もるなり
江の嶋掃除浪 相州嶋のまま 嶋弁天さこの
嶋当月二日波浴宮術して嶋のう
ちよりる毛天文洪波と以て嶋中
の汚穢を拂ふ是を掃除浪といふ ○松前渡
是ハ南部津軽出の高人産物文
易の為之搬来松前へ渡るを是
凡北海冬春の間寒気強く波お
だやかならず故ゆ四月ようやく出
岸す ○梅天 唐人成都を以て
る 南京とす蜀中の
梅中則四月よりあり此を四月の
梅雨を以熟梅天黄梅天もし
つくさを嘶 ○和清の天
て梅天といふ

夏

もし清和の天なること和清と難
しるハ清和の序名を避る事 源氏
物語ハ和して ○煮酒 酒の気
又清 味を失ハ
まる為ハ煮酒の法を用ふ
京師こまを酒煮と称す ○余花
春ふかくして
青葉の中に咲く ○若葉 新樹
葉 紫草の 結び
和交るなり 「若葉の楓」若
葉の花 「ひとり葉」 病葉ハ紅葉
なりなるも又病て のごとく赤く
黄ばみなるなり ○夏木立 艸
茂る木下闇 ○葉櫻 桜の実
卯花 山うの木。義根うの木。三ツ葉
うの木。唐うの木。岩本うの木
「ひとつ草」「雪見草」「垣見草」
以上卯の花 卯の花くたし 卯の花れ
の異名なり 咲うろふ
る雨と ○桐花 白桐。黄桐
いとく 花。紫桐。椅桐 ○

梧桐 桐に似て皮青く滑皮なり一日月の間を知るべしまくて十二葉あり下より かそへて十二葉の中ふ小葉あれハ其月閏に風風の極とする ハ此桐に ○檀の花 仙。杜仲。思仙。木綿 ○枳花 葉ハ橙のごとく木橘のごと白花を開く ○蜜柑の花 大和本艸ハ其花を ○柑子花 花柑 ハ子タチバナとも云 子と云 ○乳柑花 久年毋花ハ也云 ○橙の花 橙に似たり ○柚花 花香甚 ○金柑の花 白き花 むらく ○雲州橘の花 白き花 ○佛手柑の花 実熟して人の手に似たり故に名づく ○橘 軒生草。昔草。包橘。蠹橘。庭古州。とこよ花又 ○厚朴の花 葉櫛の葉に似て鋸歯 ○秦椒 大なる物尺に及ぶ

花 山椒と小さく ○椶櫚の花 巻の初め魚の孕むがごとく毛と ○柳の花 材に ○櫻魚或ハ櫻鯀と云 ○ 七の妙あり一名多寿二三多陰三三島の巣 ○ 四三虫喰ぞ五三霜紫坂ふ一六三実あるも三葉あるもの子 ○ 実あるとも三一出と称の七絶といふ

槐の花 実ハ秋 ○柑類の花 ○花柚

○繡毬の花 ○山苣の花 白き花 ○要の花 金様子 紅毛茨 ○箱根茨 ○木天蓼 和名和太々 非人拉り ○岩梨 ○鼓椿茨の花 ○覆盆子樹いちご 蛇苺。つる苺。ぶと ○牡丹 ○深草 名取草。日日草。富貴草。夜白草。てりき紅草。 ○鐘草 ○くな ○花王 ○山橘豊橘 共小

牡丹の異名に白牡丹 色深白ゆへ也

紅牡丹○芍藥。えびすぐさ。えびすぐさ。芍の草相。えびすぐさを茶皆異名也

○杜若 燕子花本草小馬蘭

とあ

○貝吉草 加不ゑ花

以上杜若の異名に白花と八白色の名に又白花八芍藥と

呼ぶもの也

○罌粟の花

ひくもの也り百蕊

り罌粟しあり

葵。二葉草。野葵。立葵○知

。小あふい。錢葵。水葵

母の花 ゑに

○一八の花 異名と紫雅草

。蓼尾ぐさ。ゑんびの名ゑ和名ゑ余野

とゑり花茶ゑ也ゑ杜名ゑ似さり

○

阿片。鴉片。阿芙蓉ゑ

○

踊花○白頂花○美人草

。蓼美人草ゑ

○宝鐸の花

花紙紙のごとく

小無る青白色より

○胡蝶花○

茶挽草 味ひ麦ゑ茶

。崔麥穂あり

○刀豆

花 色淡紅ゑ

○紫蘭花 紫又白

り

○風車の花○虎耳草

虎耳八葉小ゑり

ゆきの下八葉ゑよりて名づく

「鴨足草

ゆきの下八葉ゑよりて名づく

ゆきの下

○根都古草 針のゑゑ

ゑとゑふ

万葉

○豬殃々。葎花ゑ也ゑ

万葉

ゑ八八重むぐら

○蘭の花○玉巻葛 葉の

ゑ

芽出しの

○玉巻芭蕉 新葉未

生ゑる

物生葉ゑ

○荀。たゑんゑ異名

ゑ

○竹苗。初筍○

淡竹筍 紫竹筍 味ひ俱

小用ゑ

○

篠筍 篠八小竹ゑして俗

ゑ笹と呼ぶもの也

○夏

枯草 紫草 ○石藤 ○盧陀草 つら麦 ○蠶 ○蓮の花の根 ○綿蒔 ○麥秋 秋とハ百穀成熟の期 ○麥の秋風 ○麥苅 二年麥の異名 ○杜鵑 ○子規 ○郭公 ○杜宇 ○百声 ○魂迎 ○田長 ○無常 ○夕預 ○妹背 ○冥途鳥 ○手の田長 ○宿まる時ハ二指前ニ向ふ四ツの田長ハ是と云て名ばく ○沓直鳥 ○沓直鳥

○不如歸 時鳥の鳴声 ○側伎羅 ○謝豹 ○鷹 ○鷹の雛 ○剖葦鳥 ○葭原雀 ○入梅 ○飛蟻 ○蟻 ○蟻子 ○鰹 ○鰹釣 ○松魚 ○肥満魚 ○鯨 ○烏帽子魚 ○老

あるもの流れ来ることを繰のこえ不
しとい漁者此もの漂流するを
見て繰獲るその港 ○生節 鰹の
備まうるこぞ
さ晡くあらさるものなり ○鹿の
江戸の俗見たをもりぶーと云
袋角 鹿茸。表裏て四月うせ
ふる角ハ袋のやうく袋角
と手ふても ○蚕の蛹。蚕繭。蚕蛾眉を
季を拭ぐ ○枝蛭 木の枝よをむし
作る時を 丙蛙くしくり
いごくと云

茄子の花。初 ○晝白 ○鶉
茄子

翠 無三夏物 夏の月 夏の
雲くも
くり ○短夜暑し ○涼し

汗衫 汗巾 ○日傘。青傘
。管笠
。編
鬆 ○夏の柳。柳 ○榊。榊

くる。○青蔡椒 但州朝倉谷
絲さも

の甚
美之 柚山椒 所〻稀にあり枝葉ハ
ハ似り実ハ仕て香気抽橘の類
して殺うくも 崖椒 葉大し
を開き実ハ緑豆の て細
くくし味美なり
なり効ハ ○刈葱 春葱
外のめし ○馬歯莧。醤弁草
和名を沙 。醤杉草
いもくいへり ○路。鼓文花
草 ㊀ 麥 七種あり。紫。赤。青。
香。馬。水。木蔓あり
藜 苗をハあつものとして食ふ
なり草の成長まるものを杖と
を ○根芹 和名いしかり ○蓴菜
一名いしし
海松。水松状ち松のごくホ ○水
草の花 ○蚊 蚊帳 蚊遣
火。蚊火と 蚊柱 蚊の多く集るとふ ○
もいへり
蜻。蚋子 ○蛭。水蛭。草
蛉。蟆子 蛭。笄蛭 ○蚤

○蛍。新蛍。山蛍。流蛍 ○蟭螟 蚊の雛ホ

巣をくふ虫をすくといふ ○目小見め鳥 雄雌

○蚊母鳥 口より蚊を吐くなり ○蚊母草 蚊をまもる叶あり ○子子 中を化しく蚊をまもる之

蝸牛。かたつむり或ハてくをといふ ○蛞蝓 ○蝿

○壁虎 ○蚯蚓 歌女 ○蝙蝠。伏翼。天鼠。仙鼠 ○夜燕。蚊食鳥 云

鵜川。鵜飼。鵜舟。遣鵜。鵜縄 鵜人捕魚をとらせ未々咽

ユトらぶる時その咽を押バ自ら吐

捕者只列て漁人の多ゆ出ぶ

魚を吐く ○魚梁 ゆ下をとゆて

又妙あり ○胡鮒ぶりの ○水鯖 網ホ漫〻

用ゆ幾内

中ハ見を物語〻 ○水鱧 五月雨

ハ也も自然と多 此時海辺へ

よりて網を以て迎ふ也水鱧と云 ○干

鱧 ○干鰻 名古屋 ○干鱈 ○

塩鳥賊 ○鯉 ○洗ひ鱸 川ホ

なるものと ○津波須 鄙の小さ

ゆ〻ともも なる也

を ○鮴 処々の谷川多あり ○目高

云

小魚之京呼の人ハ見をそ

とゆハ此魚ハ多くかふり ○金魚

○銀魚 ○鰕鯉 地侯ふ ○青

○鷺 蒼鷺。和名みと ○通鴨

凡ゆ多ハ其ゆ見ゆ〻ものハ必ゆ

古果へゆ〻ものなるよそのかゆら

なるものをと

ゆ〻鴨しゆ ○方目鳥 ○鮓

鱉。鮨。ともよ。沢鱸 ○蛇

もゆ〻と訓を ○蟹。豆ホ

毛虫 ○蚰蜒 ○火虫 長の長 地大を

をとらんと
てくるまあり ○結夏 ○夏籠○夏行○夏断。
夏ゝ○夏経○夏花凡仏者四月十六
日より七月十六日まで一夏九旬の間
禁足して安居もとゝふ ○海藍干さて ○
木布 木のわたをさらさざるものをさいらくいふ ○単
物 ○新麥 ふきものゝそ
おそ
ぶきさものゝそ五
六月の内よ出ツ ○切麥 冷麦 煮冷
汁 ○扇 異名。永紈。雪雀。
回風。招涼。かはぶり
○凡う竹 ○伏翼 扇ハ也と蝙蝠
とゝ作り
○たなき竹
出をゆる扇を東ハ
枕草紙ハ
の去年のか ○團扇 ○夏風 夏の
風ハ中を吹く方
物を長出ること ○夏雲 夏霞
業ハ西の方赤くして南へ
白雲ハ日和くもゝ

五月 蕤賓 圖蕤賓ハ蕤ハ下也
てゝ賓ハ客なり
陽気ハ小さくなるを陰気主
人ゝ成ゝ客を敬するの義なり ○芒
種 圖小満の後十
五日午酉小さきを ○夏至 田芒種の
後十五日午ハ小さきをゆう。茂林。
鶉月。皐月。敵。諏月。蒲月。夏五。
夏半。盛夏。さ月。早苗月。いつ
色月。きくさ月。吹喪
月。さつき月。さくも月 ○賀茂の足揃
朝日ハ八上賀茂の氏人等馬七
疋速速と爭ひそのわさの甲乙を
めを見競るの
○松本祭 粉日江
州大津
松本村之奥神平世大明神ハ
て神体仁徳天皇ハ廣ゆう ○
菖蒲を献也 三日ハ日内裡
へまるゝあり ○
菖蒲の輿 左右の近衛ハ内の六
府あやめの輿を奉仕
の階の東西ハ立又時の長
を折て用ゆ
ゝくおくゝゆう ○早瓜

を供せ四日山城の内園より内膳司の面々早瓜を供ーす

○菖蒲葺　四日都鄙とすべく奇くの彩よあやめをふくゆへ仲夏の時節毒気多く生ずるゆより是を去らんためなり

蓬ふく　是もあやめ小用ト

○端午　端五とハ初五

くいふごとく月ハ七度の五の始めなり日ハ七月の五の始なり端とハはーもなり訓也

○天中の節　五日午の刻をさー

てちう

○艾虎　艾人。艾虎ハ艾を以て虎の形を造りて

或ハ糸をきりて小虎ー是成艾

菜ーつけて内人名いくーくなり

天師を画く　端午ー於て師を画き是を奏る

又泥塑の天師を作り艾を以髪と

ー蒜を奉ーし門上ー垂て邪をさく

○儀方を書　五月五日一寸許の紙ー儀方の二字

こ

を出て赤の四方ー結まれ

○粽。

八月年蚊蠅と退くとなり

ちまき。角黍。雄粽。艾粽。秤錘粽。九子粽。笹粽。飴粽。飾粽。かさり粽ちまきハ千巻なりおくー巻くいふ如くして毒虫をまこやもといふ

むなり

もとゆひ茅　是も粽

ことらふ

○飾

兜　けづり掛

のかぶと

○五日異名。重五。重午。端五。端陽。地臘。蒲節。鮮粽。天中。艾節。朱符

○菖蒲引　あやめ苅。沼澤ちかく小おりうちて引なり

菖蒲鬘　聖武帝の時ー初ふより続日本紀ー出ー

菖蒲宴　菖蒲生菰まぐ異木の枕ーてまるー

菖蒲枕　菖蒲帷子。菖蒲浴衣

○

蒲枕

蘭湯　小浴を菖蒲湯五月

五日蘭湯ー浴ー芳艸ー浴を蘭ハ沢蘭くその効蘭是ハあら須

菖蒲酒　石菖を切て酒ー浸て是を呑雄黄を

たゝりかゝえてやまもくゝり菖蒲
一切の邪気をはらくゝ菖蒲
刀いふ〳〵る蒲を以てかきるそ
木刀のくさりを菖蒲くゝるを菖蒲

蒲冑 削魚の甲こまもの菖蒲まきかさるあり 長き根
菖蒲なり永寿六年五月五日あやめの根合せといふことありそのゝ式多合のこと
しるやや ○幟 飾甲。この日幟甲を飾る事ハ光仁帝の時蒙古の賊来ると早良親王討手として出陣あり親王伏見ふちの森の社に祈る時に五月五日忽地に風吹き海あれ〳〵戦まこと
勝ことをはるさり ○棟と佩 五日 棟の例によるものゝ
葉をとりて身に佩ハ悪気を逐ふとあり ○樗菖 あやめ
めのこと〳〵彩ふくこそも田舎ハ
端午の日樗の葉と菖蒲とをあ
せんなんと ○藥日 五日全き日
といふ水なり
を取或ハ九散酒合せる ○藥玉
五月のおもものゝ。今日葉菖を五色の糸にて酒〳〵舞に沙くまハ悪気を拂ふとや多くあるあり ○藥草
きあやめともよるあり
摘 五月五日を菜日とゝして この日切の菜草を採なり ○競
駒 馬ハ四五月の馬ハ菜猪を食 ○百草を鬪せ
唐の中宗の時安乐公主端午に百草を尽くしたゝ ○長
命縷 巽縛五絲 朱索
五色縷 壽索 條達 條脱
以上この方よ ○印地打 童のふち
いふ菜おあり をねて戯
をあそぶ 射より起る印地と
ハつぶての色の地に分て印のごとく
放よりてえつく ○競渡。島車。水馬
競渡ハ越王勾
踐よ起る五月五日の競渡ハ屈原を
を拯ん〳〵をもて先り後逐ふ
戦こ生る屈原忠の日を以汨羅に死
を人船を以これを救ふ今の競渡こ

主その遺風なるべし ○左近の真手結 左近の馬場にて騎射まるなり五月三日ハ左近の荒手結四日ハ右近の荒手結五日ハ左近の真手結六日ハ右近の真手結なり云〻 ○粉を

りの日 この日五月三日随身褐のもとりをおりて来るひるもとりの日

〻〻なり〻〻ハ ○粉團を射引折の器なるべし ○唐の宮中端午毎に粉團角黍を造りて毒を射るわざるもの食ふ

る 〻〻を得る蓋粉団滑腻にして射〻〻〻都中盛に此戯をなすなり云〻 ○

桃印符 赤昊符 桃ハ西方五木の精毒仙木なり能邪気を壓伏し百鬼を制す今の人門上に桃符を打て邪を避ふ〻〻〻を以てなり ○鬼の羹 鬼の炙 五月五日鬼の羹をつくり百疫を除く又鬼の炙を食んもなるべし悪をとゞめのゆえなり〻〻〻 ○鴆鴆の舌を去

鴆毒をもつて五月五日その夫を去る時ハ酒を鴆 ○騎射 馬弓五月五日昔ハ豊楽院にて騎射を御覧ありしなり馬を馬方〻云 ○

神水 重五の日午の時雨降ハ急に竹を切べし——午の中まで

る神水なり是を呑めハ百病を治す或ハ丸薬を製すべし——

加茂競馬 五日この競馬ハ七十二代堀川院宝治七年五穀成就天下泰平の為始て十番是の馬料を寄らるる例年是を行ひ

めなり ○藤の木林祭 五日山城国紀伊郡深草山の南にあり是を

る神舎人親王の ○新宮祭 五日大津彩宮ハ三井寺の山中にあり是を

是を祭ふる不新羅明神 ○生

玉の流鏑馬 五日 接陳山東生郡天王寺の辺にあ

り是を流鏑馬の一座 ○六日菖蒲 京江

天生玉の神なり

戸の俗屋上に菖蒲を葺て菖蒲湯〻〻是を浴せる也

五日の夜の雨露を受る○宇治
ふるして神水まるあ成

祭　八日離宮の社ハ山城国宇治郡
宇治の里にあり安ぶ三坐
応神天皇菟道雅
郎子仁徳天皇なり

○今宮祭
九日〻今十五日を用ゆ山城国愛宕
郡紫野にあり祭る神牛頭天皇な
るよ

○空祭　十三日摂州宮の津
に大社ありて祭る神

上賀茂に同じ例

○竹植る日
五月十三日〻

五月十三日を竹醉日とす又竹
迷日と云此日竹を植ハ必活と云

○両社祭　廿三日江州下坂本より唐
崎に至るの路傍に両社
あり南ハ若宮権現北ハ酒井
大明神之上大本居神と崇る

○有
無の日　廿五日是ハ村上天皇の御
国忌〻依て禁裏に政
ゆ事を止て急用あれば
行なく右有る〻ことなり

○住
吉の御田植　廿八日摂州住吉に
あり神田を植る

以て神に
を行ふ〻

○大原志　丹波国桑田郡にあ
り祭神一坐伊弉並尊伊弉諾尊
天照大神と以て三坐とも此社へ
詣ずると昔より おとらざるよ
空日醴を醸して神に供ず客
ふも餐応ず又商心のもまるか
えて世俗甘酒祭しるそ

○
御田扇　伊勢山田太神宮の
田植之時神の宴席に
て神に陪行の扇ありこれを伊
田扇と云是を以田をあつぐ風
情をなるを云と笑を以田をあつぐ風
又産婦も此扇を求て内宮
の授よりくれハ極め安し

○五月鏡　五日
昔唐山楊子江ふて網を百〻に結
ひて此後を結ふ〻と云ふこと
り是を以て本邦
あるも流るるり

○虎が涙　五月廿八日
多く雨ふると虎の涙の雨と云是
ハ昔大砂の虎〻て拾女を喰殺
とを別る涙変じて雨と云ふ
世俗之日の雨ハ虎が涙なり〻

賑給 是ハ徳しき民に米陸奥国
より給ふ事りしいふ ○祇園の神輿洗 欽明天皇の御宇
晦日祇園の社より靖を各杉の葉と
結て禍災を拔ふ茅授といふ花よ
入て神 ○富士垢離 五月廿五日
禊洗あり 二日まで富士の行人毎日河辺に
出て垢離をとり富士権現を遥
拝奉る冨士参 ○五月雨 徽雨。
諸小用しいふ
梅雨さゝさ是ハ五月雨クタルの ○
暁さらさ雨ハ夕くとて晴ものゝ
入梅 墜栗花。國人立夏の後庚
の日より産こゝ入梅 ○芒
種の後壬の日より産こゝ入梅 ○五月闇○
と以て出梅とも云
白ぐべ黒ぐべ 白ぐべハ入梅のうちよ
晴ノともるゝ黒ぐべ ふ雨降ぐらもく
とハ宇めさ暑りてくも降ぐ黒ぐべ
内ゝ又晴るゝ ○半夏生 五月中旬
きあるをいふ

十一日より世俗この日を祝ひして
竹の子と食ひて是竹節出を生
もるの
れあり ○蟬の初声 ○鶯音
を入 ○反舌無声 礼記の疏に反舌を蝦蟇
と ○帷 釈名に云帷ハ囲ひ以て自障と囲ひ和名加太比良
襴の花 古代帷の染色にいふり一
説ニ云ふ
暁ノともるゝ黒ぐべ反とも志ゝ是ハ辻の
字ハ假名ふ ○羅 有よりぐる
りゝじゝ云べ 也と上ともも
若竹 ○今年竹 列玉草 河玉
草 新竹
竹ハ是竹の異名 銘竹 細き節
支あり矢 業平竹 雄竹のごゝく
竹ハ用ゆ 小ゝて節も
蝋竹ハ似り女竹男竹の 観音
又多ゝ在業平ゝ云
竹 絮絰くつ 布袋竹
みりゝり

苗 ○早苗○早苗取。○早少女 若苗○玉苗○田植 ○植女○田植○田植望ゐり早少女ハ早苗植少女の略ホや田植ハ田植

ゐ ○楝の花 楝或ハ樗ヨ作る又楝とも俗俱 雲見まくいひ苦

ていへ梅檀之 ○榊の花 万葉ヨ神樹ヨ

作る誤て榊ヽ ○山梔の花 丹。木

も榊ハ俗字之

越拙「用ヨハいそめ色ヽてゐい

ド。おろ〻ヽく色の名ようそてか

くハ ○石榴の花 古来より石榴

とり 三種あり本紅

千葉白千葉黄色

桃色ありかりて弦に愛もべ

栗の花 ○合歓の花 茎上半 ハ白く下

半ハ紅ゐり葉ハ夜ふ〻て夜ハ合

も福ヨまるゐ如き〻ヽ

末の中略

あるべ ○天南星 一名弔掌 和名おほ

そ

ゝ ○五月躑躅 杜鵑花と云て

ゝ

の茎稚枝多〻そのうち八木として

黄赤色もの「杜〻」「さるま紅

ゝ」ものを「赤朱色」「小つぐさ」

九月之 ○南天の花 ○南天燭 南燭。

男蜻 ○漆殿 ○揚烟 ○牛蒡 ○ごの名

あり此茎の汁とりて米ヨ漬る

ゐ〻ヽ ヽ食ハ健ゐ ○

牛蒡のヽ故ヨ牛蒡〻名〻

忍冬の花 冬ヨ凌て凋ざる「金

冬」の名あり

銀花 忍冬の茎ゐり ○未央柳 其茎

似て杉雨の時 ○瞿麦 単弁ゐる

茎茎ゐらく

もの ○石竹と名づけ千弁ゐるもの

と洛陽花と名づく 種愛衆ヨ抽ぜ

ゐヨ拾子〻いふ 紫色千年 「大和

と粧ふゆえ〻茎茎〻いふ

撫子 唐撫子 驚撫子 藤

撫子川原撫子 大和梅子ハ紅 梅色ヽ唐梅

子ハ色ゝの糸あり茎も梅子ハ茎の形ゴ
ときゝ名づけ茎梅子ハ色よりて
の名なる「石竹」そ二種とも花ともに梅
るゝ」小もゝ竹とも日出さきもハ茎梅
てゝこゝとあり「日ぐら草」
り草「下ゝ紅」いづれも梅子の茎名なり○
女貞（ゆばき）○貞木。所々の茎細く白
さきゝ茎開く梅ハ梅子ハ似てき
さゝゝゆえ梅
梅又ゆ梅ゝゝ
なり梅ハ女貞ゴ○黐樹（もちのき）四五月の比白茎と開く
似て青く光あり
百合（ゆり）茎ゆら車の輪のゝゝゝゝゝゝ野の日光の産
り梅ゝゝゝ
ハ茎色少ゝ大和より「透百合」茎州より
出る、茎色ゝゝゝ
出る「鹿の子百合」博多百合堀
あり
百合（ゆり）山丹。百合ゝ似て茎小梅も
小さゝ梅ハ桃ゝ似ゝ茎ゝ「鬼
百合（ゆり）茎の大ふゝ「秩百合」見ハ深山
ゝゝて名づく 濱谷の百

ゝ生ゝ茎ゝ沈ゝ一人縄ゝ巻ゝ下り
て僅ゝ一株を秩ゝ秩ゝ分て金ゝ上る
ゝ秩る合ゝ
名づけゝ「糸百合」○「玉簪」
紫陽花（あじさい）一名四葩の花。花茎ゝ
ふ手鞠ゝ似ゝ唐の白
朱天ゝ名て紫
ゝ名つくゝ○「紅の花」。紅藍花
○ま摘花茎の色紅ゝて茎藍ゝ
似ゝ名ゝ茎の名あり此茎ハ漢の
張騫ゝ求て種と天竺より得て初
る本朝へ伝ゝハ呉より種を得ゝ
る○「下毛の花」漢名未詳小木ゝ
茎の色ゝ紅あり
淡紅ゝてゝ
ハまゝゝ似ゝ○「酢漿草の
花」一名酸母片茎二ツあり○「夏菊」
六月ゝ開ゝ八月ゝ至る○「萱草の花」
牡丹ゝ香氣ゝ
淺草ハ合歓ゝ色を喰ハ人ゝ妻
と忘ゝ一むゝ又悔姓の婦人ゝ茎ゝ
る時ハ男子を生
むゝ茎男ゝハ○「鉄線の花」花譜及ハ

三寸番繪ゆも纏枝牡丹と載せり○
是狹線の茎なるもしくいふなあり

朝露草　一名銀錢花て又茎の形
楮に似て白青うるこまあ
り高サ一尺斗枝あり紅○蚊帳釣
に色らきタに萎むなり

草　莎草ホの数くが留の葉に○天
似て甚くきこつくあり

門冬花　和名もとよろくさ　名くさ
もとうつら。海辺に生る
ものと葉ハ杉の○龍葵　茎葉あふ
ちく和うるあり　ひよ似く
実ハ茄子のふ
さ花小似しり○石菖○花菖
蒲　茎あやめ　○紫羅襴花○
とそ別さ

時計草　茎日の内まるくかし○
ちる依て時計のあり

花つる　蔓のるかり○姜の花
只かつともも元

この茎日に背て昼合一夜○真菰
冠を月に生さろて移移を

苅○藻苅。藻苅船○和布
刈　正字石蕣之紀州加田○海帯
より出ると多さとく

苅○胡麻蒔○秬蒔○李

杏子　胡梅　○梅漬る　梅干　梅

録　皮肉共に剥うけて脚　青梅餅
乾一梅酸とまるもの

梅　枝雨の時熟まその内　楊梅　氣
黄ゐて薄あく液多一

條桃○無花果　夏日花。優曇花茎なく
一て実

のるく○天仙菓　紀州山中にあり
結ふ枇杷に似てふ　茎ふくて実を
さ小見嫁く食ふ

○枇杷○桑

實　正字　椹く○薑○生胡桃○

早松茸　五月に出　○茄子　異名
るとうふく　崑
崙瓜。草鼈甲俗説に秋茄子嫁に
食もるくいとくいふ一ふりいふ結へ
集の名ふもあり

初茄子　正名。新茄。和名
一るふふ方茄

茄子く出る物なり ○瓜の花 諸瓜もくさ葉さくなり

[瓜] 浅瓜。白瓜 [胡瓜] 黄瓜 [瓠] 干瓜。青瓜

瓜色白く甘きゆえ姫瓜〳〵小枕瓜子ようつく〳〵きものハ瓜ハ似しら

兒のゝ ○ [菽植] る [種植移栽]

る菊椿梨 植替ゝ ○ [壅培] 橙橘菊牡丹芍薬こまら

ふこせ ○ [獣狩] 。鰓 ○ [照射] 昼狩ハ

まぐ〳〵 夜ほく支山のくらきを照さ火串とし

ものゝ上を立て麻をつりとせ射て取なり

[鹿の子] 。麻弾 麻の子 ○ [魚簗打] 魚簗

八川中ニ木を打て網を

くふて魚を取簗どうつ ○ 水雞 ○

[水鳥の巣浮巣] 巣なり ○ [諸]

[鳥毛と替] 。羽脱 ○ 毛ハらんとて羽ぬ

け変る ○ [毛と替る鷹] 壮ぬけて

る ○ 七月とよ

生も ○ [黒鳧] 大きくまくて黒く臭ふ

こふ味ひ美ならぜ

[鳧の子] 俗鴨〳〵ハ誤 [軽鳧の]

なり鴨ハ二名 [軽鳧の]

[子] かるの子ハも 俗ユ

のゝいこのとゝ ○ [鵙鳴初] 百舌

多をもちて沖まるハ非なり

百舌ハつ。こなりえし ○ [鶺の]

[巣] 蛍糸ハ巣

くもものなり ○ [初蟬] 蝉の異名

と春女と

[打磬蟬] 空蟬さも

出くなり ○ [鰺] 室鰺

[膨鰺] ハ [列鰺] 江戸之浦まある

相州ゝ 文日 懐の縁なり ○

[蠻子] 酒鮓の上を蠅出なり後小蠅

なる蛆虫ゝ 蠅の子まあらを

[水馬] 。鯉虫。飴 ○ [鼓虫] 小さき

黄くもいゝ 黒き虫

なり矢張水もゝ

一名。まくうせ蒲ヤ云ゝ ○ [蛇衣と]

[脱] 蛇脱ぬけとゝ口不浄之義

また即脱け或ハ大ユ飽時ハ又脱

まとゝ

六月

清輔奥義抄に此月農事をことごとくつきぬる故にみな月と
いふ荷田東麿の説にみな月とハかみなづきな
る月の上下を略したるなりといへり此
説よろしきか
○林鐘(りんしやう) 囲林鐘ハ林ハ衆之義ハ聚(あつまる)にあつま
るといふ物の多くあつまるをいふ然る
を俗鐘を鐘として林の鐘などゝいふもの
ありて大なる誤なるべし
○小暑 囲夏至の後十五日斗
○大暑 囲小暑後十五日斗未
○季夏○瓜時(くわとき)○且月(よ)○遯月(とん)○朔月
○陽氷○風まち月○鳴神月○常夏
月○蟬の羽月○晩夏○水無月

氷室 朔日 氷室の氷ハ四月朔日より九月晦日迄献ずるとも今日
とするなり
○氷室の御調(みつき) 今日園にて氷をとりて
献ずる
○氷むろの氷水 の氷
おものとハ熱月よりハ氷を用ふといふ氷水のもとハ源氏

氷室の雪 夜をまふもちて氷水ハなやうりもる氷をいふ
幽谷なれハ清路ありてまことにあるべし
○氷室の櫻 五六月まで花路る
○水餅祝 朔日○いやもちを
茶をいふなり
○勝 つる遠風ありて民間餅又
ことを氷にいはふとするなり
曼荼(まん) 朔日摂州四天王寺の西門に
あり本尊愛染明王毎年
この日開帳ありこれを
勝曼愛染参といふ
○富士詣 朔日
○江戸浅間参(せんげん) 朔日
扶桑の民人ハ二山へ参る之
浅草駒込本所高田等ハ麻のふし
権現の社へ参詣するに土産に麦藁
の蛇を売る
○忌日の御飯(えび) 朔日 忌火
ともいふ
○一夜酒(ひとよ) ○にさけ その日
くハ不浄の火を打ちゆることなり
○六月 造進ハ明日ハ供まつるゆえに
えつけるもちその醴(あまさけ)を以て
會 四日伝教会又長講会といふ
是ハ伝教大師の忌日之勅使也

山の麓あり弘仁十四年始て行る○御躰の御卜十日是ハ神祇官の人本宮より持て主上の玉躰を拝ミあらんことを石ひ奏まる○月次祭毛ハ六月十二月ニ度社〻幣を奉らせあり○神今食六月十二日伊勢太神宮を勧請申させあり天子ミづから神膳を供ぜさせ給ふ○解齋の御粥十二日の日の序出の大床にて畫盤一脚をもて序粥赤き土器に和布の序汁あを添らきを盛り三口めを進て序器をとるとあり○鳥越祭九日この社ハ江戸渋谷の城主の氏神なり別当を勝寺あり社主結木氏なり別当を長朱寺と云氏神天児屋根命日本武尊と云○祇園祭七日十四日○人皇六十四代円融院天禄元年六月十四日より疫を出す○

長刀鉾○函谷鉾○洲濱鉾○雞鉾○菊水鉾○月鉾三本船鉾等之その外畧之○河原涼み六月七日より十八日の名ハいろりて四条河原の涼みなり○江戸天王祭元禄のもじめ大に流疫せり八官より後より神田明神の社地に勧請ある所の祇園三社の神輿を出して街頭を渡御なり疫を拂ふことい〻ふ○祇園臨時祭十五日円融院の比宇天延三年六月十七日初て行はるゝあり○厳島祭十五日芸州佐伯郡宮島より祭る神三座市杵島姫神田々姫湍織津姫ふ○竹生島祭十五日江州の湖中より宇賀神魂毛武天皇天平三年○津島祭辛未竹生島の神現ぜと云十四日十五日午頭天王の祭こ尾張国海辺郡門前の庄茂渡の里より氏神をもとめ西海の對るよくぐり後に尾張の海辺に移る仍てその旧地に

名を表して○芦の神輿 摂津国に於て
津国にいふ あり用
毎年芦の神輿といふことあり
中の疫疾変異ホを卜ふ
熱田祭 神社尾張国年魚市郡江
崎松姫島千竈の々まあ
り祭神
五生こ○江戸山王祭 十五日神社 江戸永田
て拵まあり江戸才一の大社ありて
祭のわりもの笠絆笠五百三十
余所
あり○氷川祭 江戸赤坂まあり
風土記に小六月
宮くいふ祭神素盞
鳥尊奇稲田比咩こ
○浅草寺び
んざら躍 十五日江戸金竜山浅
草まるに於てそ日びん
舞をどりありその形古き
面もみえて基古雅なる躍○かつ
う嘉定銭 嘉定喰 嘉定酒
宮を中略ちゝありとそ又六月十六
日の嘉定ハうの紛の徒まを嘉定酒
宮とあまハ勝くふ名詮
を賞翫もるものうしや○相國

寺懺法 十七日洛の相国寺にて懺法ぶくいふ松風の後小松の
と懺法ぶくいふ松風の後小松の
続あるの孫宝もりとあるハ誤なり○
伊勢祭札 十六日十七日外 宮の所祭礼○博
多祭 十五日博多の横町の神ハ筑前
国那珂郡まあり祭神中為
ハ櫛稲田姫命右為ハ祇園牛頭天
王右為ハ天照皇太神宮勧請ぶ○
志渡寺祭 十九日より十七日まて
山清光院志渡寺の本尊ハ十一面
観音なり補陀洛観音の再来作之
と云○西蓮寺殿如音講 十六日或
ハ十七日西蓮寺家如音講と俗
ぶくる。如音天ハ弁才天なり○
座頭の涼 十九日盲人清聚庵
ふ景と 納涼会を行
涼ぶと云○鞍馬の竹切 廿日洛外鞍馬寺
まあり竹切ぶくいふ数千の竹を截
て天と祀る毒蛇を退治をしむ

るの法をりゝえゝ○御手洗詣十九日より晦日

まてか茂の社ふてあるゝ○糺の納涼山城国

宮郡あり糺或ハ只洲ゝ作るゝ意を糺の宮ゝ云蓋地名ゝよりて是を

称ゝ○上難波の御祓摂州東生郡

高津の宮ゝありこの社ハ生玉のゝ

あり糸祇比賣古曽の神本名ハ

下照姫○坐摩の御祓廿二日摂州西

成郡坐摩太神宮ゝ代○愛宕

子の市民ゝらくもるゝ

千日詣北四日丹波国桑田郡水雄

のゝふまあり祭る神伊弉諾

尊ゝ火産霊ゝ○北日条詣○橋立

まれむゝ十度まあるゝ

祭廿五日丹後国与佐郡長の方

速石の里あり里中ゝ長き大

崎あり是を天の橋立ゝふゝの○

名ゝ久志浜或ハ久志の渡ゝ名つく

天満の御祓北五日摂州西成郡天満ゝあり祭る

神菱ゝの事ゝ○住吉の御祓晦日毎年

六月晦日但ゝ小

月ハ廿九日ゝあり○加茂水無月

能六月晦日夜上賀茂の社ゝ

音楽あり乃ち祓ゝ修ゝ云ゝ○

名越の祓夏越の異ゝ名ゝ小

剋金ゝ剋ゝ

と祓ふゝ○麻の葉流ゝ

麻の葉ゝ切て幣ゝ

ゝ祓ゝ流ゝ○唐崎祭

晦日近江国唐崎大明神ハ

女別當山王大宮初題の地ゝ○節

折晦日竹ゝて土上の庭ゝ

法ゝ

ゝよりゝ

ゝ

大祓晦日百姓悉く朱雀○茅

門ゝ

の輪午頭天王の種民ゝ来ゝ教

どかゝ

ゝ

茅の輪と同おなじ。ホを以つくる。ホの名なり。○形代
ホを以つくる。人形を作りて
○撞木作板なり。そもさ撞て身の災難を祓ひ川に流也
る。○夏神樂川辺に柵を搖て神
をまつり夏
祓をなす。「夏板」「夕板」「御板」
川○鎮火祭晦日卜部氏の人火を打て宮城の
四方の隅にて祭る。○道饗祭
火災をふせぐなり。晦日巳の刻の四方ふて鬼魅の他
方より来るを入きたらんなるを
上に供物を
備へ祭る。○小蠅ふる神蠅の
こゝく悪邪多きをいふ日本紀○
夏つ巳の熱邪をとゝ
施米東山西山小山ゝ法師ゝ米施
ホを施さ
ること。○雷鳴の陣かみなりの声
三度高くなれば大雨以下近帯の
次雨にて弓箭を常に用ゐの縁

雨を候して天子
と守護ゝ。○大山祭七月廿八日
より及び近國の信俗相州大山石
なる大権現へ祭詣をなを初山く
ゝ又七月盆中より登
山をなを盆山といへり。○温風黄
雀風六月中東南の風あ。○鷹
鳥と黄雀風と云
羽遣ひを學ふ雛の去ぬく飛
ゝをそらへ
腐草螢となる月令○溽暑暑者
さ日○夕立白雨。涼雨。暑雨○三伏
三旬。夏至の第三の庚を初伏ゝ
四の庚を中伏ゝ立秋の後初の庚
を末伏とも是
を三伏といふ。○天貺の節會要
云宋の宗祥四年詔して
六月六日を天貺の節とゝ。○土用
「土用干」。虫干。虫拂。○鷙鳥涼ゝ
生て水鳥の類出て
七夕ゝ八月ゝ。○露涼ゝ風

薫る○青嵐 夏木立の梢の緑をゆさあらもをいふ
○雲峰 夏雲多奇峰と陶淵明の詩あり
○炎天 日盛。日やけ。日まけ ○日傘
浚井 曝井ともいふ 井戸替の事 ○納涼。川涼
○川まとい。川涼し。舟すゞみ。舟遊び。涼みくら ○清水
。泉。清水結。清水汲。
滝壺。清水せく。清かしと ○掛香
薫衣香。匂ひ袋 ○水掛合 夏戯
水辺などにて水かけ合をするをいふ ○萬鬼行 後漢
の時伏日には鬼出るとて尽日門を閉或ハ湯餅を作りて餓鬼と名づく
○竹婦人。竹奴。脚馬といへり。抱籠をいふ
竹の籠をいてき或ハ足をもふせ ねむりて涼しきをむるうつハものゝ
○簟枕 竹をもて是を作る。生涼しくらんもの ○川
狩。縛。四ツ手網。持網。撒網 ○青鰭 その色青しゆゑ名つく大なるものを
鰺魚と名つく和名あふさハといへり海中ニて ○海月取 海母取ともいふ ○鵜
飼あり
鷺 夏はひそりをとくちめあり 中ハひそりの羽をとらかるゝ為れハ飛て弱く取やすし
○練雲雀 此は毛をふるひをあらふむ夜よんで練雲雀といふ
○蠓 手斧 朧俗ま水道蠅といふもの在り夜涌なごは生まるゝものあり房総二州の俗にきをも手斧朧といふ
○燈蛾。燈蝶。火燎 蝶に似て黄也 枯渇と云し
○空蝉 すべての蟬をすてゝいふ
○蟬の諸声 多くあつまり鳴き立るをいふ
○蟬の脱 俗にぬけがらといふ
○蟬時雨 蟬の多く鳴をいふ
○残蠅 秋まで残る蠅の事なるべし

[stamp]

きを通俗志に六月に出るとあり○金亀子。蛟蟥。蛸金○鳥毛虫。螺。蛸。蟻。驕虫

蠐螬一名地虫又根堀虫ともいふ多く土中に生じ又糞の中に生じ

○青田六月ちさき田に苗よりきしの上なるより作せしなり

○田草取 夏より秋にかけて二度田草を取りて二度田草を取ることあり

○百日紅。紫微花。怕痒樹この木を猿滑といふ一名皮痒樹といふ

名づく○竹の皮散。竹の皮脱又皮剥ともいふ

○烏扇。射干。ひあふぎ

同物にて葉広く弓のかたちなる花茎短く葉扇のごとくちらばりたるものひあふぎ

実九月に成る○荷葉 蓮の葉を陰葉と稱ず荷葉ともいふ

茎葉を芙蓉花のごとく或は葉と花と云根を藕といふ茎を莖と云 池

見草 露堪草 つまぶき

以上蓮の異名に又花君子藕花水花風露郎ともいふ○

慈姑 燕尾草と云形ち燕の尾に似たり○河骨

○萍蓬艸○菱の花 五六月に白花開くなり○

王簪花 白雀山と云大なるものを俗に亀ぶうしといふ

馬鞭草 茎ふちに毛ありて穂の名をつくつくし○

猫児眼睛草。沢漆。野漆此茎の形煙草の

こきに似て多く自然と生ずるなり○鉤鐘

草 紫花を開形釣鐘のごとし白茎淡紫の茎あり○麒

麟草 高サ一尺ばかり形○虎杖

尾草 茎白し虎の尾の形ちに似たり○晝顔。

子花。瓶花。と
やひとしまとも云 ○夕顔。壺盧
瓢の花と六月の 。瓢瓜
ころ白き花さく ○苦味甘さゆへ
してかんびやうと名 苦瓢と對
つく形ち色こゝろ ○千瓢務 新
酒土用中まむ 千
きてゐまるり ○苦瓢。瓢草タ
ゆて別種 良く一類
と味ふかし ○風蘭。桂蘭。仙
と好んで茂 ものこの手風
るゆゑ名づく ○凌霄の花。紫
陵時夏より秋よ 蔵。
て花をひらく ○商陸花。花
赤ゆり白花の 白
もの八根も白 ○山慈姑 俗馬
ふ花淡赤色ことの ○鷺草。花白
根解毒丸ゆ加ふ 学
ゆ仁 ○赤草 水ま正字地
ゆり 棉之花八笑之 ○楮
花。紙もゝ茶楮八割
して紙ゆする木之 ○蒲ゆ
穂。種の形鉾ゆ似ゆり ○蘿摩
ゆゑ蕃絡ゆ似ゆる

花紫白色之秋実を生ず
ちまのごゝし 採綿ゆ用ゆ ○緑豆
花色黄之和名 ○芡實。花紫之
やえかりゝ ○芡實。花の下
ゆ実を
らんまで ○蘭草。虎鬚草。
心草李ハ多 碧玉草。燈
く四月ゝまで 蘭と刈。土用ハ
之畳の表ゆ用る 入ゝ刈
ハ侍後と上品ゝ ○席草。毛ハ張
因しく畳の表 床と云
ようつ下品ゝり ○菅と刈。土用ゆ
二三日の内ゆ干上ゲされハ色ゝり 入晴天
らゝゝ色ゆあゝハ色ゝ ○
藍刈。京都の産を上と
ま一番刈ハ秋ゝり ○麻。麻
刈麻ハ皮を剥て
糸ゆまゝ物ゝり ○苧麻。和名からむ
かり直苧かゝその葉のゝ
まさ稜ゝゝを
産ゝゝ奈良晒を ○白麻刈
織る物ゝゝなり
櫻麻。櫻麻ハ白麻之核の花の咲
に拔るれの名とも又麻ゝ

茶の搗よ仕くる
ゆえとも いふ ○夏引の絲麻の
こと之伝よもろそとも いふ ○綿の花
白糸と八夏蚕の糸をいふ ○酸漿
あとかづき 草
青鬼燈 ○青蕃椒 俗ユ 南蠻
胡椒又高蘆 ○蓑荷子 俗よ夏
胡椒とも云 ある也
夏かうう秋生まる ○豆 小角豆
を秋めうといふ ○編豆 ○蒜の根
さげ。十八 青さ
さけ茶白 ○編豆 ○蒜の根
うり種数甚多 ○甜瓜 濃
瓜の種おの長さ 州
かすの巣郡 ○柔村 ○胡瓜 京九条の田
是甜瓜の真祖 ○胡瓜 京九条の田
の大サ梨のごとく ○辛瓜 白瓜を干て
その色黄白 ○辛瓜 白瓜を干て
なり四五月出る 松山侯の
きいらりといふ ○瓜の皮 時献
瓜の匂ハ瓜へ
名ハ其角こ
也 ○瓜の皮水
けりとかぢり ○熟瓜 甜瓜の種数
味ハ芳

り ○菜瓜 白瓜 ○南瓜 実文の
〇種を始て長崎ニ作る ○南瓜 以本邦
ふまひろまる形九くひらく ○南瓜
南蛮より渡る ○南瓜
以て南瓜の名あり ○南京瓜 同一種
数なり形ちまだんどくりのごとし
かぼちや唐なすびともいふ
胡地より出 ○阿古陀瓜 形ち南瓜
しを以て のごとく
是ハ甜瓜のごとく ○金瓜銀瓜 州
煮て食ふもの
兎糸那田辺村ハ
色美金のごとし 三州より銀瓜出ツ
その色白
紙のごとし ○青瓜 田
是西瓜之傍山の井 ○白林天 梵天
ゑ出て秋さうべ かと
ゑ瓜の種数少 南都より出るより和
州田村又ハ南都 ○ろ
ものつら ○ビ実ふハあらず ○瓜田
ゑ履を納ず 瓜田不納履李下
不正冠是嫌疑を受

もも未熟をふせーの謂なり○汐見坂美濃の茶開く○海藻○紫菜○赤藻○桂花陰漬すべし食ふ大小二種あり○林檎實○夏桃○奈良漬製る○納豆製○醤油製○將酒つくる○夏切茶六月の始宇治の茶人形茶と壺ふしりて人に贈ること

きと交切喜ーしふ○麻地酒豊後の出の製なり

水飯洗ひ飯引飯乾飯糒奥州仙台及び海州なり○葛水砂糖明るる出るものの住ー○

水冷水賣江戸の街々を桶一荷と卸ー冷水を冷水や賣る振舞水夜日市井の間小瓶を出ーこと

抹茶碾ふと深川玉屋を名よ苦ーむくとして先を香をむるく○

心太四字ハ石花菜孫川宇和島の産と上とも漫晴菜とし

ヒ○瀛鱠江に鱠○涼臺

涼ーきを

辮慶ハ燕の招○夏節

霍乱疫の名霍乱舌○疫痢汗疫熱撒

疫ーく○香薷散薬草の名なり

のあくり狂のくぐると活を○壅培。松さらばる

庚羊の糞とつちくハ実ろうの後ーとかふ

蔓ハ土用の後ーやーとかふ

○夏深き夏の別夏小淺る

夏を隅る夏の限夏を忘て

夏と追ふ夏の果秋小隣る

秋ちかき秋と待来る秋夏

のくま夏と送る○富士の

農男 留主にして四月の比ぐんくさを
の清紙りさるゞ宝永山の方
まゝ人の形代こくくさの清のこること
あくこまゝと農男と称まこの紙宝
見りる年もあり又ひえさる年もあ
りちの家をとゝこと見ゆふ年心を
五穀熟まゝ
とゝふ

秋 秋ハ緒心万物を緒迫して役ち
時ゝ成こあさハ明く清明く或
ハつふあさハ寒くあくまて通ゝ万
物秋ゝ至て寒冷して万くかくる
寒とあくるくい
ふゝ冬ゝ

○夷則 陰夷則とい
ふハ夷ハ傷
ちり万物始て伏き
天刑をかふむるちり

○立秋 閏大
暑の
後十五日

○処暑 閏立秋の
後十五日
ゝ申ゝ
建ちり

七月 ○孟秋。上秋。新秋。首秋
○蘭秋。蘭秋。桐秋。肇秋
○蘭月。相月。涼月。文月。七夕
月。女郎花月。親月。夷則月。ふ

みひらさ月
○みそあひ月 ○一葉柳ちる 一葉
ハ桐をいふ葉ゝハ桐
ゝも涼り一首ゝ

○諸寺施餓
鬼 ゝ月朝日より十五日ゝ
法の例ゝより

○新吉
原燈籠 享保元年江戸吉原の遊
女ゝ菊が追善の為一年
七月中の所の楊屋者燈籠を出ゝ
是より例とゝりて毎年このゝ
この節男女群集ゝ
ゝと燈籠見物ゝいふ

○洗車雨
六日ゝ後雨をいつゝ
夕の車をあらふゝいふ

○北野御手
水 六日山城国葛野郡北野天満宮
ゝり七月六日松梅院内の水を称
ゝ代ゝ松風の硯ゝ
の葉を係てゝ代ゝ

○机あ
らひ 硯洗ひ 七六日児童硯机
と洗ひ清め草の
葉の露をとり墨の葉ゝ七夕の
手向の詩歌をかき付まる

○七
日節供 七日内膳司より尚日の節
の供所を献ゝて供

序ハ毎日なる物なれども一年の内節ごとなるを節供とも也　○七夕　牽牛織女二年一今宵雷　三星の今節ゆゑなくいふ　○牽牛星　織女　○河鼓　牛女　二星の名を上略き いをこひ星　河鼓星　彦星　織星

〇をさるくめ　さみだ　秋さり姫　ささもの姫　ふる姫　百子姫　絲織姫　彩ぐ姫　不姫　梶の葉姫　以上さいく七姫の名なり　と　もし書　あしことのかけはハ　もし書　ものさ書とかくも　〇もし姫　ひと知　もし姫　もし姫　〇星の祭　星の手向

〇星合　彦星　星祭　星の手向

〇七夕つめ　たなばたつめ　天の川　銀河　曬衣　巧　〇願

〇七夕　〇乞巧奠　巧ハたくみなり　女の〇業の器用小物や　〇鵲　かさゝぎ　行るまり　鵲　種類　鵲の橋　種類　の説あれども世人去る　紅葉橋　此橋もなし　てよあるてあらまたと　へハあらもしといふなり　年の渡　年一度天の川を　星の屋形　此日半人　の星を乗る殿　〇箇の池　る箇池ともいふ　国を横をいふ　〇巧針　婦人　ふ七ツの盥に水をいれて　星の形をうつす　七孔の針に色糸の糸を　〇蛛の絲を　と色糸七夕に向るまり

〇占ふ　婦人瓜茄子ホを供へ祭り次　の日早瓜の上に蛛の巣を引　これハ巧を　ねらうなり　〇庭の立琴　琴に星　に向

〇七夕借　借物をかりいふ中ふも　色こまを　して色を向るまり　〇索餅　索麺

のうしろ〳〵七日の節句ハ雁を除くなり
たりこの夜〳〵七日親族索麺をお
くり互に食もるく

秋さり衣 孝星のまそて
もろもろ衣く

左小舟妻迎船 織女う牽牛
をむかひる出
るとて心なり

真穂船妻〳〵船 牽牛
りて来る舟
といふ意く

七種の船 いろ〳〵の
宝を七ふ
積てる向ふ
をいふなり

星の薫 れの上れ火
ろ〳〵ふ
宝〳〵紀
物あり

梶の葉 七夕ハ七枚に
梶の葉〳〵を向
の糸をとるとふ色の糸ゆきて
屋の上〳〵あけ物〳〵ものるなり

短冊竹賣 その俗筆〳〵を向るとて
ふ色の紙を多て短冊と
ち毎の葉ゆ結ふそ
の竹を麦ありくものこ

芋の葉の露 芋の葉の麦を去付る
〳〵芋の葉の麦まそ去付るく

飛鳥井の鞠 七夕日花を井邪
波のあ家蹴鞠の

金あり
怪例〉

○池の坊立花 七日京六角堂方丈
〈池の坊門〳〵集り三星〈を向〳〵
て立花を奥坊を立花ハ雷位職出
発法師よ
り初る

○本願寺篭花 七日東西
の門徒の末派并ゆ家記系数程と
以船の形ゆ作り又篭の形ゆ迎ち中
ゆ華美教ゆとゆて

○逆の峰入 七日大峯〳〵称まるハ即金峯山〳〵
宗派〳〵本山高山の別あり本山の峯
入ハ則七日ゆ堅渡俗の
〳〵を逆の峯入〳〵ふなり

○文珠會 八日仁明天皇の御宇より
始て東ゆ西ゆて行なり

○六道参 九日○迎逢又條の末建
仕るの南ふある六道の珍
皇ゆ〳〵ゆ〳〵ゆ

○槙賣 九日諸
〈系るとゆく
まりて拭の枝を買ひ家ゆ飾り矣
系ゆ〳〵ゆ俗聖矣拭の葉〳〵葉て巻
ちく

○清水千日詣 十日七日来
ふ 俗ゆれ平

日の千度まゐる。○淺草四万六千日
あさくさよんまんろくせんにち
詣 同日七月九日より十日まゐり
系詣の群集殷々佰度詣と叫ぶ
万六千
日にちふ。○王子權現祭 十三日 神社武
州岩附領王子村にあり祭る所の熊野三社拝殿に別当修験山東光院
亜播る
しいふ。○踊躍 歌曰どとり。念仏ととり。
踊躍。伊勢踊。水ゐるとり。小町
ととり是列遊戯の業なれども往
古よりそ
く絶也。○攝待 門茶往来の人
なり接待ハ唐土ふも
ふるくよりあることゝ。○燈籠 高
灯籠。切籠灯籠。舞とうろう。
揚灯籠。船灯籠。花灯籠。新灯
籠。折うけ灯籠。廻り灯籠。軒の
灯籠民俗仏事とるも月ろれハ仏
く供もう
為設ること。○盆前草市 花菜
麻から麦
。盆太鼓 盆市 来の俗太鼓同歳。
大小の木刀。加伊

良ホ三尺を拭旁特別中作り離重張
箔の紋ホホと麦るこれ盆踊必用の
具。○魂迎 迎火を十三日夕方な
こ亡人の亜灵と迎る
く麻稈を折て門辺で
焼てこれを迎ふといふ。○盂蘭
盆。盆会。盆供施餓鬼ハ盂蘭盆
金の遺風ふて常ふ行
ふもこれも山月のうちハ徳
寺ふてまるら行ふ祭事ことを。○亜
霊祭。灵祭。魂棚。棚経。盆の
宮司四日より十六日まゐる
て家ゝ棚を張先人の位牌を
列ね是を魂棚と亜灵棚とも云ふ。○
生御霊 亡者の灵魂を祭るを也て
現在の父母兄姉子孫の生
ハ灵を祭ふこと。○荷の飯 精米
是文明の時ハ初まる
の祭ゝ包ミ吉祥菜を加て上を
括り賜者て生牙洗を洗ふこと。○
刺精 鮭の生を切て一刺と云是を蓮の飯
東鮭 合て一刺
とと親族互ゝ送り
て今日の祝儀とを。○墓参 七月 朝日

より十五日に至りて名
猶考の墳墓に系るべし○中元十五
日正月を上元とし十月を下
元とす〜七日を仏節とす○八幡
宮安居の頭十五日安居の所八大経
営し惰山の弁に〜八十二
月十五日に
も誤数下○三井寺女詣十五日常
八女人禁制の山なれども七日
一日八女の参ることゆるすなり○夏書
納仏者四月十六日より七月十六日に
至り一夏九旬の間仏経を書写
其後是を堂塔仏像に納
め三界万灵を回向す○夏解
草僧尼解夏の日緒を以節を東ね
て檀越に送る是を夏解草と
ふ又吉祥○鮮夏十六日俗流の夏ごもり
なるべし○善福寺童相撲十五
日江戸麻布新堀町にあり麻布山と
号す世俗毒虫を除く号を七
月十五日八岡山子海上人の忌日に
七日も同じく毒虫の麻布持現の

社あり是を撰あり
り是を祈るなるべし○水灯會六
日城州宇治黄檗山万福寺の○照
僧徒宇治川に出て傍行す
冥十六日流灯を冥界に送る意
して川辺に麻柄を結て
の俗八月十五日なれども十
五日に焼火あるべし○施火燎
○大文字火○鳥居火○船形の火
○妙法の火東海道外の山にて各
の形に薪を積て焼之廉
ケ谷大文字此業西巷に○経
水流十六日天王寺井にあり
日経木の表に亡人の戒名法
名を記し絵井の水○閻魔参十六
を向吊に参ず
日閻魔王八牛獄の主宰者の経日
にして来る七日と終日とも○
祐天寺千部十五日より廿五日に
江戸目黒にあり同
山八祐天大僧正より○衝突入昔
法会にて〜入と宗〜祈願せる
参拘或八その家代妹娘妻妾にて

あさ見さきと思ふ物を家の前に置る
きハて透き見し近所まで紛州
山田より松ヶ崎の人山田
のつと入といふ是ハ十六日なり ○松ヶ
崎題目踊 十六日松ヶ崎妙泉寺堂のまへにて男女う
ちかはり題目をとなへ
つけておもしろく踊るに ○鷹の塒出
四月より羽抜かはるを塒へ籠て塒
を出すこれハ十六日塒を出
きこし藤原草より出たり 「鷹の山
別 是ハ七月廿五日之鷹の巣 「あら
鷹 あらましとらへて来る人多し 「鳥
屋勝 鷹羽毛を生じ羽翼既に
備て塒を出る時勢ひ特に強
きをしとあるを 「初鳥狩 ちつと鷹
鳥屋勝と云 鷹特出
ふるまひも是を別とし 「初雁鷹狩 「鷹
そハ小鷹を秋とも
鳥を祭る 處暑の候七月の中鷹ヶ鳥を食ハしを用て始て戮

を行ふと八時
の命により ○御靈の御出 八
日御靈の社ハ上ハ宗極の如西にあり
下ハ宗極の大炊の御門の如くあり昨
與そ日御旅所へ御出
之祭り八月十八日也 ○宗祇忌
十八日俗姓ハ飯尾氏所々の東つと称を
しくまて純粋の武家ふりが學を随
来て雜鬚し宗祇と住し生涯を
室水にかよひ世の行脚をしくまてしと
より連哥 ○文学上人忌 十八日そ
の事へ之
の行状往々古書に
出て聞して知るべし ○愛宕火 廿四
日愛宕池田伴氏ありて彼地の愛宕
山にいろいろの燈籠提灯を點しく
掛して見るなそその
火光近くより映を ○地藏祭 廿四
日洛外六所の地藏詣之 加茂、岩
藤森池○小科○伏見○鞍○大宮之 ○
御狹山祭 廿七日種家修りの社前
の日暮まで神前をかるるその外へ
家毛是ぶの猶ハ来をさを蓄有り ○

角觝 すまひとハ手くらべを云ふ
ふハ伝ふ わざあふ くらべる 比の字と
觝カ又ハ相撲 すまひ文字ハ同じ
部領使 。壱相撲。辻角力 禁中より法師ハ使とつかハす
まて力者と ちからもの なり ○鳩吹 猟師の業なり
ハ又人に麻ありとも ふまもをと合せて吹くを鳩吹と
ハいふと加といふ事の鳴く ○殘暑
その事の似るゆゑなり
餞暑 送去 餞と云 暑の去るや ○
送る意 餞暑と云
花火 夜ふるさきと ちく人 秋とす ○
るとハいふ未詳 ちらぬ
扇おく 閉扇おく 又ハ秋の影
く秋注 なりて 稲妻 稲のつま
扇うち 立 之 ○ 稲のる
電 ○心かよ 稲つま
いふ電ハ雷 ○ を云 ○
糇米 ○田畑の虫送 ○ 楸

夢の畧 又雷電 桐 ○楓 本名紅葉 雞冠
又かしらりきげとりのつ
木とろふ 和名を必ずしも
ゆハ蟷のまふ似る形 ○檀 文字
ゆ 蟷 蛍 ○ 柘榴の実 安
紙つくるものと也 ○ 柘榴の実 安
ふふ 本名黄 ○荻 蘆荻
蘆也 ○櫨 櫨ろふ 水辺 毛
○萩。萩。木名。うしあ。萩の義。萩殿
いハ萩のとまかるを ○鹿鳴草
萩の戸ハ禁闕中 ありを
和名 芳子 芳冥草 蒿の
物 芳子 芳冥草 蒿の 屬
ぬ 俱り
考と久 古萩草 紅艸 野
草 月見草 ねくさ 考る
草 以上義の 秋海棠 ○蘭 義
美名 ○ 稜
○桔梗。ありのとをき。むとを。 澤桔
梗 紫ハ山丹ふ 紫 紫
て服白人 仮中 ふ

○牽牛花 一名假歌子 又朝皃と云 ○女郎花 ○菜の花 ○仙翁花 一名紅仙翁 ○観音草 ○翁草 本字は白髭翁の名なり ○藥師草 羽切草 ○蓋母草 ○鳳仙花 ○旋覆花 野徑の水傍の草に多し ○野菊 ○鬱金の花 ○芭蕉 ○茗荷の花 ○蜀葵 ○曼珠沙華 ○木桂 俗桂と云 ○蓋菽仁 ○桃の実 ○金桃 ○木瓜の実 ○蓮の実 ○柿 ○槐の花 ○蒲萄 ○棗 ○刀豆 ○夕顔の

○蜀漆 ○瓔珞草 ○蔦の実 ○瓜の実 ○蓮の実 ○澁柿 ○新澁柿 ○槐の花 ○蒲萄 ○棗 ○刀豆 ○夕顔の

実 瓢 壺盧 ○青瓢簞。百姓ハ白一ツ瓢簞ハ千なり瓢簞○西瓜 この種ハ中古西域より伝来せり今国々にハ生せずなり「あこだ瓜」近世畿内往来の人ふるさと西瓜ハ似て○秫 ○粟 粟の苗の穂を穂ものと対して穂を生ずるもの○稲葉の雲 稲の穂の虫 稲の花。富貴草。とこなつ。以上稲の吳れん「稲むしろ」稲の穂をかりて遠くにかけ干すこと○早稲。早田の稲。稲をかりて遠くにかけ干すこと○室の早稲 室八早稲なり室のそとなる室の稲をかりて室のうちにかけ干すこと○三百十日 立春の日より三百十日目人社の家中にて金を殺伐の乱変動を故ふ必ずあり○廿六夜待 江戸の俗今月廿六日の夜月のおそ三更の後の移向を弾人を海辺に出て眺ふ輝角也○初嵐○

虫。虫間。虫妻月の夜なく野末なる出て去をとる見をたとへくい

「虫撰」若ハ面上人さが野をぐへ道をしるべたとへ

「百蟲冬蟲」蟋蟀の類。ふてつち。ちくろ去。沙雞なり。いふはるこま 異名 ○叩頭虫 ○蟹蟹 その俗見と ○蚣蝑 又結刑 ○鑣虫 馬の奥の ○馬追虫 養ま似て ○松虫 ○鈴虫 おのくなりまりてなつけくり色やもていくくまきハれしあれもるハ後 ○蟋斯 俗織ハ又月 ○竈馬 状ち俗織ハ似て稍小之脚をくなんて竈の後ハ竈くゆ色ハ竈馬と云 ○蕉虫 ○藻鳴虫 蓮ハ俗ハ又 ○蓑虫鳴 漢名蓑衣虫又結草虫 ふ又氏ちの鳴を父

言しく○蟷螂この虫好んで肱を
いふ之　とうなよいぶむり
の名あり又助し
て糸ぐりともいふ○秋の蝶○秋の
蛍○秋蝉　浮土までいまぐく
蝶を秋の称とも○
青蛉　本艸云一名ハ胡蝶和名加介呂
蜻蛉布。胡黎。秋津虫。赤卒。
色やんまも何まても大小あ
りて色を見るのもの○蛁蟟の
種類之内大ちく
しよしと鳴をいふ○蜩　茅蜩之名の
蝉よりも小はし
てき好之多
く山中にあり○冷麦。あつ麦

兼三秋物　竜田姫　秋の野山を染る神なり○
律の調。千秋楽。万秋楽。秋風楽○霧。霧の海
○霧の籬。○朝きり。○「霧白ふ　けふ　霧の
夕霧。胸の霧。雪霧
まるらくさく
あるをいふ「霧さち人　人をいふ○
露。しら露。露の玉。上露。下露。夕露。袖の露。おく露。涙

の露○身に入「冷まじ「良寒「肌さむ
月。月の顔。月の雲。月の
素。月の輪。志まがし「月
の桂　まるくわらかなる月の影をいふ「桂男「さえと
男　あらはれぬる月をいふ「新月　二日月をもいふ　三五夜中の
月を　凡七八日を上弦とし「弦月　廿二三日を下弦ともいふ「三
日月之「玉兎「銀兎「霊兎「玄
兎　大いつきも月の名あり「在明　十五日以後の月をいふよし
「哉生月　哉ハ始まりてやえり　初秋の月をいふ「既望
十六日の月をいふ「立待月　十七日の月なり「居待月
十八日之「臥待月　ねまちともねまち　廿日の月なり「曈素
月の光之「金波　上　内「月の傘「廿日夜
中　廿日の月ま正刻に出「更待月　廿日れ月なり

「常娥 嫦娥ハ羿が妻也不死の薬を偸て月中に走る是を蟾蜍
といふ也「真如の月 清浄真如 雲外の月の心「心
の月「胸の月 空にまた 月の心「盃の影
盃の光あるくよろこぶハ 秋さらべし表の月を挿つ「月の劔
三日月の形を刀劔にたとへし也「月の都「月宮殿
「真夜中 廿三夜之子の二刻に出て 年の二刻まで入る子ハ殺生 ○
椎柴「椎の葉「椎の實○柾
柾と云木のうらと杜仲とその木に似たる別しがたきものなり ○
芒「薄「鬼芒「縷芒「鷹の羽
すすき「篠芒 芒ハすすきまたしふてく「蘋
芒「十寸穂の芒 穂の長くて一尺ほどあるをいふ「麻
苧穂の芒「ますほの糸 ますそ麻 の心と

ものふの芒の種長くて糸あるくのものなり ○葛の葉○
忍草 忍草とも月草とも ○蔦 牧蘿又おそし ○草
花「色草 秋の千草あり 野の花○芭
蕉○辨慶草○雞頭花○
茢萱○雁來紅○鬼燈○番
椒○若烟草○東埔塞瓜「布
瓜「南瓜「冬瓜 かもハ毛種の名也 この瓜冬にまでたもつハ
白毛ありて種に似たる故に名づく ○狗尾草○薑
そ薑の字を書ハ誤成也 ○芋 ○芋魁○芋の子 ○青芋○唐の芋
○螺「連芋 水中に生ずるもの「里芋 蓮芋の一
芋
種園に生「薯蕷 山の芋とおなじもの「零余
子 薯蕷の子也「長芋 薯蕷の屬なり「黄獨 俗そ

聲りて見を似て首烏といふ ○團栗 ○柳烘 柳 まき時箸中に入て自然に酥紅熟をその甘きこと蜜のごとし 酥

柳甲夜柳 毎年京堅禅寺に出生す若の仕り中登に彩りかれ 白柳 淡柳を以て枝をつらぬ或八条に

よりあり 胡盧柳 豆柳 手柳

乳をもふ 胡盧 ○山城字 木練柳 柳の木に似たるを

治す也 木練

以来称 御所柳 大和の氏平村より出す柳法の上平也

ろくも

のこ 木淡 似柳 出平柳より似て少し芽多 伽

羅柳 形小にして長く色淡 田舎柳 見

材う形多く大也て味淡 透徹柳 硬材にして

しよりて硬材にして 團座柳 形大

形長く尖あり味ひ

甘美伊予産材よりあり

てまろ 樽秡柳 見研材に美京の

らりく

い 蒲萄柳 味美しかくしも 柳

ふ 食用多しとふ

糕 美材の米粉と和し類蒸をなす

糕 小豆よりも多く血を利を止む

効 ○猿酒 猿菓をとりて山中

あり 樹木の虚或は器服

の凹なる不ま貯へ亟数日の後

熟して酒のごとく味甚甘味なり ○梨

子大殺シ梨子之その大なるもの用

り一人に五寸小豆の色

紅瓶子梨 瓶子の形にて 松尾

梨 その色黄ばみ赤くその内白

梨 黄赤含はの中松尾の産 水

梨 梨に似て 空閑梨 肥あの

梨 梨の色なり 産さて

大 ふの浦梨 苧生の浦伊勢

よりあり 妻梨 形の美色 鹿梨

なりあり

ふを忌て ○新米 ○新藁

ふ ○今年米 稲干す。稲扱。稲苅。稲舟。掛稲 ○田の

のあさて ○鱸 小さくるを世ハ古く
亟ことそ ○鱸 ふ六七才を波録と
ふ又ハ上須 ○沙魚 ○鰐 ○九月
い赤とふ 越中ハ
匹とふ越中ハ
出るもの上ハ ○小瀑江鮒 鮒の小
江鮒とふ或ハ名吉或ハ江女
又俗ハ須走小さ江鮒とふ ○鰯
引。 鰯雲 秋大鰯ハ
裂膳 ハ一片の白雲ありそ
の雲隠くとして波のこ
とく長と綿雲とふ ○鰻簗 この
ありて雌雄
時ハその子塔縷魚の磐ハ長てなず
少えハ縷 ○秋の宮 皇后宮の所
縷とふ
の宮ハ東ハあり
る又ハ西の宮ハ
西ハ在をを以て中宮とも
秋宮とも中なるなり ○秋七種
秋七くさの名ハ ○萩 ○尾花 ○桔梗
○葛の名 ○女郎花 ○藤袴
秋七方万葉
ハ出さり

八月 南呂 ㊥ 南ハ陽の呂ハ旅の
助 小ハ陰気が陽気を放
ると ○白露 ㊥ 露ハ暑の後十五日
ハ庫ハ
秋分 白露十五日半酉
○仲秋○桂月○竹林○壮月○中商
○中律○雁月○桂秋○南呂月○素
秋○燕去月○雁来月○雁六月○葉
月○さくるさ月○こそめ月○くち
つ月○秋風
月○月見月
八朔 八朔 梅 ○恃怙の節 ㊥ 恃の節
供 この頃田の実の実の年と生
ハ稲の秋稲と書ハ秋書
なり ○尾花の粥 八月朔日尾花
老る長寿代 と和して粥よ
の良薬と云 ○繪行器 水仕て
さを注り目出 行器の小
友後とをいろ ○天中の節 八朔
日ハ凶悪の日なり故よ吉ハ陰凶ハよ
り天中礼とする 貨を老彩の門戸

よ貼を
しとと ○綵雀 造雀。造松虫。造雀。虫の不とも者
里ひくとなりて後ろひよ
そて見女目者ものあり ○三村祭
泉州堺甲斐町の東まあり岡口明神
とふこれ住吉明神の外宮と称して
祭八朔 ○堺天神祭 三日泉州堺
日二日之 甲斐町の東よ
あり六月十二日を天神祭
を秋祭とゝ神幸えびを奉へ
所あり ○天壽の節 四日唐土ゆ
とより 七日を天
寿の節
とゝ ○北野祭 四日なる神二十生
中八天満天神東
八中将 菅三 西八吉祥文 菅かの名りつ條
帝 品 ト方へ
永延元年八月廿日発れそ
友等ありし後年
四日ゝ定めらるゝ ○千秋郎 五日
七日
唐支宗帝降誕の日ゝ故ゝ名
つく後改めて天長節といふ ○白
髭閑帳 五日近江れ下白髭大明神
八稚内彦ゝ若八開帳あり元
緑中ゝ
止ゝり ○敦賀祭 一日越ゝ国
敦賀郡ゝ

り奈神仲哀天皇 ○司召 十一日。
ゝ気比社ゝて 秋の除目
○京官除目○定考 ○待宵
ゝ
ゝ
ゝ

佐宮祭 十五日豊太閤八月十五日恵礼のつゐ宮社より始めて
いへり ○志賀八幡宮 十五日近江ゐり

箱崎祭 十五日筑前おゐり ○譽田祭 何州

八日こゝ神ゐり十四日寅の刻後(後門)ちる十五日恵礼
奥、奥の後(後門)ちる十五日恵礼

安濃津祭 十五日伊勢国之者ハ社之寛和九年迄愛宕
小ふ

○豊浦祭 長門ゐ豊浦郡より
恵比

月十九日之者ハ ある時祭り八九
八月上年ふや ○三津八幡祭 十五日摂
州西成郡地三津のゐ町より
之津と八名津義は雑説は是 ○富
士

岡八幡祭 十五日江戸城南泉川より
ゐり祭るゐ鶴ゐ是より国
一別当大宋山永代ゐ宗泉川
才の大社之或八云神体八者之作 ○野

口念仏 十五日播州加古郡教信寺
宇教信とゐ伝加古川ゐ居して念仏
を唱ゑ旅人の者を頂ひるじてそ

の労を助て貞観八年八月十五日盗
賊のゐる者徒を斬らるその後の
以ゐを建ツ教信ゐ是より
今日伝法寺ゐり伝ゐるゐ ○駒

迎 ○駒牽 ○引次使 ○望月の駒 ○
ゐり系の約 ○上野約 ○武蔵約
○志ゐの約 ○諸坂約 ゐ八故ゐの牧
より牧ゐ馬ゐ牧ゐ 牧中(馬ゐ牧ゐ)
者のこゝゐ

之天皇南朝ゐ生所ゐ馬ゐ
由緒 ―公々已下次第ゐ所ゐ以て他の所ゐ
ゐる者ゐ決ゐ
文ゐ
の使ゐ ゐ八十五日ゐ
朱雀院の時因忌ゐ
日ゐ

ゐり ○菅大臣祭 十六日未刻
西洞院の東ゐ
旧跡ゐ
奥沢門の西
翌年五年目ゐ ○御霊祭 十八日上
の氏霊
八京極通筋遠松の四ゐ
ゐ八京極通大炊御門小路ゐ

棄名祭 十八日春日大明神と
ゐり 棄名の城下ゐ

り○菩薩祭 廿二日肥前玄海灘にて来船人船神を祭る是を不き祭ゝ子孫海の地よ唐人のまゐりあるゝ事尽るとゝ

り○亀戸天神祭 廿五日江戸本所の末寺村より祭る不絶繁○西院祭 廿五太宰府の神体と同○日春日の神社八洛西葛野郡にあり四条通西の土を四町斗えゝ西院村の西平林の中にあり是ゝ○秋社 立秋の後第五の戌の日と秋社とも大祇春社と同○燕帰る 燕子春社にまゐりて秋社に去る○釈奠 毎年日上の丁の日去る二月と同○

彼岸 常月の彼岸より十五日めゝ入るゝ。後の彼岸ゝ又秋季と結びて秋のひぐらしとも○野分 八月の大風とゝ

良寒 八月廿五日 肌寒ゝ又おそ○碪 碪ハさぬゝ持衣石こそハ木槌を用ゆれども若ハ石砧なるもゝ

痛よ去より 二衣打 ○衣四ゝ打。あやまれ。ところ打ぶまそ衣打拍子なり○長キ夜 八月より九月ゝ

初紅葉 薄紅葉○名木散 俳句季ゝ春より出て名ちがひ或説ゝ材機指の教ゆゝ所ゝ出て名ちがひなるもの其名ゝ○新蓋草 敗芭蕉似て秋ゝ種を出も俗ゝ新蓋草和名。かきあ○牡丹根分 大ゝ秋ゝ春の後ゝ根をゝくるゝ○

敗荷 ○薄衣蓮の祭の○木芙蓉 水ゝ出るものゝ芙蓉芙蓉ゝ出るものゝ木芙蓉是ゝ花ゝ○木犀 江南の桂八九月ゝ花と開く実ゝ是木犀ゝ

○桂花 木犀花ゝ○縷紅 染細密ゝて移薬のゝ色浅ゝ○梅蘇 正字不詳 蘇洗作蹇○

金剛草 その根強く牛蒡を整 ○
檀特の花 芭蕉の属なり ○
花紫 傘のごとし 紫を紫と云 ○白
粉花 夕錦 この花駿河の野径
鳥頭 葉はて飛ぶ鳥 ○紫
苑 一名紫菀 魂草 夜牽牛 鬼の羊菜 志を
ふの ○露草 月草 作小おそ下 花之方の花
ハ月の頃 ○宇治
花園 宇治八幡神天皇の離宮 ○
糸日桃宮 ○瀧加貫花園 近江
世時の花園 ○
ふあり天智天皇の 大は
ゆるあり 田辺 ○芒の穂 尾花。
若草 ○龍膳 和名抄 衣笠義
蓋 ○幡 ○初尾

久佐又迦加奈 ○黄蜀
俗ハこれを ○
葵 別移 ○漆の花 ○烟草
の花 一名相里 ○茜堀 異名 筋蓋 ○
藍の花 ○蕎の花 蕎の種 ○水紅花 ○
木賊 ○芦
の花 芦の種又 ○苦参引 和名
蓬蔓 ○牛の舌痴草 ○胡黄蓮
葉 ○ 葉用
引 ○藥堀 秋
山 ○ ○
茅 ○萱加る ○
石榴 千重 ○銀
李の子 ○
實 ○通草 異名 ○萄香
鳥瞰

○菊蕷（きくこう）〔本草〕木耳のごとく茎なし細き孔あるも故に通草（つうそう）といふ○蔓荔支（まんれいし）〔本名〕ぶどう〔吳名〕錦裝支○天瓜（てんくわ）一名地瓜○新羅葛（しんらかつ）○蒲萄（ぶどう）。蒲萄棚。ぶどう。さつまの棚。○種瓢（しゅひょう）○眉兒豆（びじとう）倍豆を破紫葛（しかつ）

○扁豆（へんとう）〔本草〕扁豆の莢ハ隱元豆（いんげんまめ）と云黃蠟隱元始めて持渡り来まりしなり江戸にてふ豆しろい西○虞美人草（ぐびじんそう）因て雞冠花（けいかくわ）を云なり○斜山谷の中よこの草あり枝ち雜蔬のごとくしてなほ紫色ありて根ハ斜ちて生ずと云なり○木耳（きのみみ）菌（きのこ）木よりもぬるを木耳といふの土菌といふ○松蕈（しょうしん）椎茸（しいたけ）椋茸（むくたけ）紅茸（べにたけ）〔六羊肚菜〕栗茸（くりたけ）兎蓋（とがい）鬼筆（きひつ）菌（きのこ）〔竹の蓐〕石蕈（いしたけ）初茸（はつたけ）〔湿地茸〕菌茸（きのこたけ）舞茸（まいたけ）

〔變蕈〕榎茸（えのきたけ）〔猪茸〕〔鼠足菌〕〔馬勃〕〔蘑孤蕈〕本草卒茸庵〔國本草〕茸を以て〔滑煤菫〕板より出るもの○〔蛇〕卒茸とも〔茸〕〔天〕〔狗茸〕〔月夜茸〕〔夕三〕毒大毒あり人敢て近づきとる〔笑矣子〕又笑菌ハ作るあるあ風枝杉の下にて大毒あり是を食〔バ笑〕ふて止ず終に死に至る速に人糞穢土を掌て其毒を消も形ハ偶活ることあり○毛見（けみ）農民秋に至りて年貢を收納もるるをめ懸吏田地の善悪を巡見そこれを毛見といふ○中稻（なかいね）ハ九月新穀をもむるを中稻といふ是よりまさるを〔落穂〕〔稻束〕〔稻掛〕稻といふ〔束穂〕長く大なる稻穗之ハ未だハ穗ぎき稻ともいふ束ハ一束ハ

めでたきことなり○粟秬引（あわくろひき）○罌粟（けし）

時○芥菜蒔○蘿蔔時○

小菜。はつな菜。間引菜○中稜大根。

小て根の大きさその油のごとく成とも○鴈。居まる。

○くるゝ。そはゝ。

ゝのつゝ。ゝの玉まで

ゝの字と作るもの皆誤り

ゝ金八只字と作るのゝ

ゝくゝの大なるものまで

ゝを。脇白。ゝ陣。四面のゝ。後

ゝ。白ゝ。侍ゝ

ゝ字。ゝ者

「鴈金」居まる之その人ゝ

「鴻」美食

「雁」漢の蘇武が書

「カも」

「三季鳥」莫伝抄ゝゝ

の異名とあり

系考 今上

○稲員鳥 世に伝授として孤

ゝゝとるゝたゝゝ

ゝゝゝるゝ

ゝるとゝ

○色鳥 秋の

ゝ成り

○ゝ

秋

「鵠」翡翠

ゝり○啄木鳥 一名百舌。劉木。啄

里その外 一名鶯鶯ゝゝ多

尚品類あり○鵯 一名鶯鶯ゝゝ

ゝりその形ゝ小

ゝく好ゝ

躰黄はゝ

ゝどゝゝ

○山陵を形ゝ

ゝんゝ胡桃と食ふ

ゝゝ

ゝ

○「鵲」小雀より

山雀より

「四」

十雀 五十雀 ゝゝ

ゝゝ

「日雀」四十雀より

ゝゝ

○照猿子 その形ち雀ゝ

ゝ

頬赤鳥 雀より小さゝ

○畫

眉鳥 雀より大ゝ

ゝ

眉白くゝ

○瑠璃

鳥 大サ雀のごとく大翠雀

小翠雀の二品あり○繡眼兒

鵲 鈎魚翁。水翠。金翠。

ゝゝ

ゝゝ

ゝゝ

て魚とうゝぶる 翡翠 一名山翠。魚翠鶚
蒼より世なるり 月物こそまを大さ山谷子 ○連雀 蒼の
ありて用ゐ魚とする
大なるごゝ頃よ蒼毛 ○菊載鳥
あり雛のときうのごゝ
大サ目白不どあり背よ蒼八
る蒼のごゝくるるものあり ○椋鳥
形始より小さ頃白ー脊 ○来鳳
灰色始んで掠の木ゝまむ
鮠とも云くゝまめるとゝ ○猶子
いふ一説イカルカとゝり
鳥 雀より大さ黒色 ○鶲 大サ雀の
会して味よとゝり
ごゝし頭黒く白き彰 ○鴉 雀よ似
あり素ゝりのごゝし
米紙よみとりこゝハこゝきう此ゝ目
の外よるきふちありまて畜物の
穴の紙とを物よて盞ひるとゝ
メとゝるハ此ゝの目よ似られるゝ ○
樫鳥 なんでかしの木よ
住むゝりふさ ○額鳥
ひをゝくゝ
ひゝよ低て山サ ○鶯 蕃上下くゝ

世俗物の粗略ゝ
とゝそゝくゝふ ○鷦鳥 ○鷦鷯
○くゝミ蒼 ○巧婦 ○鳥休 禾免
状キ貧ゝ仰ゝ
引 木免を以小ゝ
ゝ用蒼ゝて蒼
ゝ作ゝ蝶ゝ ○四 雄ゝの羽
以ふ ○高羽箭 蒼ゝ
竿の所ゝ蒼て
木の来ゝ緊ゝ ○鮭 倍鮭ゝ作ゝ 鰯
雑の子ゝ胞ゝ助子 ○江魚 本神
甘子ゝふゝ用ゝ ○鮭 ゝ
○草魚 ○鯉 ゝ状ゝ鮭ゝ似
ゝ湖中ゝ生ゝ ゝ名ゝ異ゝ
形ゝ ○太刀魚 ○河鹿 性ゝ
ゝ小ゝ
て山川ゝあり
夜の ○下り梁 梁ハ魚ゝ具ゝ
崩梁 ○蛇入穴 ○新酒 ○清
汲 ○濁酒 ○酸
醸漬 ○新酒糟 新走 池田伊丹の
季秋初冬の間ゝ 形酒船大低
蒼をあら蒼ゝ

九月

この月おやうやくもとのこゝろ

和名抄長月といふ又異して長月

とい○無射　圍陰気升陽気降て万物陽気に応ひて

出て食ることはしくへハ魚虫の類蟄

伏して冬木根にうつり潛むがごとく射

ることく医仍

て冬籠くゝふ○寒露　闢秋分の後

十五日斗卒

はさ

もし○霜降　圍寒露の後十五日斗

戌に速きを霜降

と

も

○季秋○抄秋○梢の秋○暮秋○晩

秋○玄月○素秋○紅樹月○菊秋

○紅葉月○彩月○菊月○寐覚月

○木染月○色とる月○小田苅月

鞍馬祭　鞍馬寺の鎮守大明神

氷室祭　朝日南都四十四町の氏神

祭日八春日伶人舞楽あり

御燈　三日春三月に出る北斗に対をならべ

幡祭　九日山城国宇治郡木幡の里

にあり祭る神栖大明神と号

くて天忍骨

の損亡をもてる所をの目録をもて

をまこつさて租税を免ーのふとも

り作るまゝくさう田とゝ

ひまゝ不恪因とハいふ○桂宮相

撲　八日六條の小田洞院の西

ふるよし拾芥抄に出る○泉

涌寺舎利會　八日洛の泉涌寺

年九月八日舎利會を行ふ事あり

律師湛海宋の白蓮よりもらるゝ所の

舎利と

いへり○重陽　重九　重陽宴　九月

九日八節句にて供ハ菊花の宴行

ふる是を重陽の宴と中世この日月

と日と九陽の数にかゝ

ふが故に重陽とハいふ○菊花の宴

○菊酒○菊瓶　菊花酒　是

臣に菊酒を給ふことあり

汝南の桓景が故事に出てこの

日菊花酒を呑ハ災害を逃ることゝ○茱

萸袋　沼に入て呑むこと○高

き小登る　九月九日望々臺ふし唐詩にあり○九日小袖　九月朔日より八日まをもりて者綿入を小袖と○あらめ汁　九日を日よりて用るよう世雑問答にもあり○菊囊　九月九日衣類を表白裏紫さもあるべし○菊の著綿　九日こ日八枕の多邪ふもとえて此日の式を調んとてお日より蒸し綿をきせ風雲を防くことをきせ日くとハいふなり○菊の節供　朋友迄よりおくるよ

栗の節句　本邦の俗々九日親戚栗を以て菊花汁を呑むゆえ菊の節供とも栗の節句ともいへり

○後の雛　雛祭三月三日九月九日こ昔八宮廷の時節八月さふや重陽より雛祭をとあて源氏より八月より雛遊びありと見えり○海贏廻　りうまの時よりめるこくをとらぬ

田夫野人の玩ぶ所にして海螺の殼を以て勝負を定むるあるこ○酒醐祭　九日山城国宇治郡小野北南原雪山醍醐寺にあり

御香の宮祭　九日山城出伏見京町の東にある祭神八神功皇后○貴船祭　九日山城愛宕郡と例へ〜○鞍馬の小一里許にあり祭る所二座高靈奥宮前との二種にして雨を祈雨と止るこくと祈雨神べとなくそ○鹿谷天王祭　浄土寺村十禪師祭ともいふ毎年廿四日ハ八九月九日こ○生玉祭　九日摂州東生郡天王寺の四王流鏑馬あり祭神一生天生玉命こを日あり○十日菊　○後日菊○節後菊○残る菊○残る菊○芳菊　九日の佳節に用ゆる物なるよおくれ十日に用ゆるをいふ俗中残菊の宴あり○小重陽　十日唐土にハ京俗を日舎〜く小重陽といふ本朝ハてハ後宴といふなり○四宮祭　十日近江

玉滋賀郡大津の駅よりあり祭る神四
坐大比叡大己貴 小比叡 仲哀 気比 天皇
八幡師 ○下鳥羽祭 十日山城国宇治郡下
賀茂より在祭る神牛頭
天王田中天王と号す ○五條天
神祭 十日京都より祭る不必茂名
命とて京師の俗この社
を天使の ○例幣 十一日是八孝徳
社という ○ 天皇より
祭る所にて例幣使とあらひて代し
天子より伊勢大神宮へ幣帛をもち
かせ給ふこと ○御難の餅 六月十八年
九月十三日日蓮上人佐州竜の口に
難百叉の下僧に一命を全ふせ給ふ
世宗門の徒資を作りて係者
に供をこれを難の餅という ○宝
の市 十三日伯吉の社地に市場の社
といふあり 幼諸国の市の始
まる多く幣を奉る物名珠の市と
とひ又取引をもとひさぐ
市も ○白川祭 十三日天満天神
りとす ○ 祭日にて洛北白

川の里南山の上にあり祭ハ本社を
居の前二町ばかり西にあり例祭九月
十三日土人 ○十三夜 ○後の月○三夜
本社祭 月○栗名月
豆名月○名残月 ○ 完平法皇
明月無双のよ 仏出さる依て我朝
九月十三夜を以
て明月の夜とす ○天王寺一乗
會 十四日摂州大坂四天王寺一乗会
八九月十四日或八十五日六時堂
に是を修せこの堂は敏大師草創
の地にして本尊八薬師日光月光
の三尊大師作
さまりといふ ○岩倉祭 十五日
神の社八洛北長谷村の西岩 八所明
倉よりありて初帝都の守護神 ○小
倉祭 十五日豊栄宮金板郡久村の
庄到津村にあり祭る神三
坐中八応神天王左八
神功皇后右八玉依姫 ○粟田口祭
十五日京都之又午頭
天王を祭る 十五 ○岡崎祭 十
日或八十六日洛東岡崎にあり是東天
王の社という西天王の社八吉田山の

禁ゆあり祭の日拜七本出るその内
一本の拜殿下より奪ひ二連大一疋を
生り彩色を施せり是を
大鷲拜と云て社家にて
十五日河内国交野郡北牧方村より
祭る神牛頭天皇八王子小野天
神拾社帝釈天王四天王服立宮姫
大明神浅原大明神結宮年番祥
寺ら代
といふ○神田祭十五日江戸神田
る神二宮大巳宮等平右門の昊ゆり
ゆりハ糀町山王と隔年にて是とに
市の大
祭なり○牛御前祭十五日武蔵国葛飾郡
隅田堤の下にあり清和天皇貞観
二年慈覚大師の勅建之尚社八
本尊の拵
造るより○築土祭十五日江戸牛込出門北
外にあり尚社号八迦古門の内
にあり敬二名田安大明神共号より○
芝神明祭十一日より九一日と社家
江戸日比谷山門外に
あり別尚金剛院神王西東氏祭
礼日数廿一ケ日ゆ間秋南多一こと

也て世俗ゆくさ九祭と又祭礼
の名社内にて生姜市ホあり○太
秦の牛祭山城国太秦廣隆寺
九月十五日上宮王聖会の
庭に於て牛祭と俗也○山口祭周防
国吉浦郡仁壁の神社九月中ノ巳午
の日祭礼を行ふ祭る神住吉三神
を以て本
社とす○度會新嘗會外宮十六
日内宮十七日「神嘗祭」内宮より伊
勢国宮川初稲を献ずるなり
又稲米の祭
りとも云ふ○桂川御祓十六日桂川
川の末流にて松の尾
より南を桂川と云ふ○穴織祭十七
日十八日拾ゆ豊為郡池田村民家
山上にあり綾羽大明神と号す穴織
異服の両社その名
ゆ三十町ばかり○呉服祭十八日結
御半為郡池田村の園の中
にあり異服大明神と号す○城南寺
祭廿日山城国乙訓郡の々にあ
り祭神一宮乙訓羽天皇之○八幡

花の頭　廿日山城国八幡山の社僧才子髪を剃泉に加る時茶を点し酒宴催を茶の事八月日とえらこうつりかくるり○

波利女祭　廿日洛陽寺辻の北宗雲の西にあり倍に繁昌の社とゝふ子孫の業を祈る鰐号八こを波利女の祀り殺ゞ元斜者女と祭主る事実八寿者天之○

旅夷祭　廿日洛東建仁寺の門前よりあり栄西因所勧請る所にて旅行の海上に赴く人八先ゞ此社に参ぜ風波の難をゝらんことを祈るゆゑ旅夷とゝふと○

上難波祭　廿一日摂州西成郡大坂住労所より才一稲荷才二祇園才三平野之後三條住延久三年勧請之○

坐摩祭　廿二日摂州西成郡の独社とゝふ○日の祭をお常八十禽祭とゝふ○

淀祭　廿二日山城宇治郡伊勢の孫小祝の東河内にあり祭る所此神一宝天逆向津姫号を天照大神とゝふ実八天照大神とゝふ○

木幡祭　廿四日山城宇治郡木幡にあり祭ふの神正哉吾勝速日天忍骨の命ゝ見地神才三の神にて父八素盞烏尊なりとゝ○

鹿ヶ谷祭　廿四日洛東浄土寺村十禅師の祭之○

逆髪祭　廿四日江州浜笠郡琵琶湖の南和坂関の清水大明神祭九の社と称も武尊吉備之孫なる関の清水の口跡なるよゝ之住り○

天満流鏑馬　摂州西成郡天満にあり祭る所の神小祝之四月九月廿五日流鏑馬の式あり社家之を勤むゝ○

北山祭　廿六日洛北衣笠山丑寅の林中にあり祭る所六尊明神とゝふ又北山天神祭とも

津村祭　廿七日津村にて三番叟あり○

昊の社　ハ摂州西成郡大坂津村にあり祭る神猪倉撞五郎素政之昊なるゝ○

鳴滝祭　廿八日鳴滝の社洛西仁和寺の西小滝滝にあり西朱雀より西河陀之ゝ九町の擁護神ゝとゝふ○

福王寺

祭 廿八日是七曜滝祭之福王寺の西山峰滝あり 昭子皇后宮○

住吉神送り 晦日掃部住吉少宮七日 攝津国住吉の社紀

神を行ひ送る 神送りといふ社紀
よ見えむ抜ゐまよ十月を神無月と
唱へ神こ出雲に集まるあつまりの宮くく
いふ俗説よりてくの日の神を送
神送りと唱
へいる故なり ○桂川の御祓 桂川ハ山
城国亀岡郷よりあり大堰川の末流
春宮の群行ハ九月十七日く前日この
桂川より抜て祓禊を修
ゆふ是を桂川の祓と云 ○伊勢御

遷宮 内外両宮その外摂社と七二
十一年を歴まハ必ず生宮あ
る之九月を以て
遷宮の月と定まる ○菊 菊ハ古今列
高潔うして
る美しき盛を同じ
じふきぞと云

見草 ちこ草 あそびあり 金
草藏 玉 加 ちこ草 霜見草 平

代見草 齢草 まさり草 まい づ
まも草 草の名 その外 山路草
乙女草 女郎草 草の王 のこり
草 鞠花 秋垂草 長月草 いろ
で草 ちぎり草 かりよもぎ 秋芝
べ草 山ゐ草 翁草 女草 隠君
子 たゝき草 百菊 猩々菊 酔
楊菊 大白 金
目黄 たきもの草 花の弟 弟草
梅ハ誘水よ先ぶち菊ハ誘草よ
くゝゆゑ梅を菊の兄と仕 菜を
菊の才
とて 秋の花 あて菊をのく
ふふハあちぎその

辨よりぐさは 秋ちくの花 也
葉改まいり
菊 奥美抄よ菊ハ
美菊くしいくり
蘇我菊
兼和菊 これも美菊之兼和帝
仁明天皇美菊を愛しめ
ゆゑこの 残る菊 つよハ九日以後
名あり の菊をいふ珍菊
の宴八十月又
日なるよく 紅葉 未聚とも云 名○色見草。

葉を表す。絵巻に「紅葉かつちる上毛野」とあり

○紅葉夜　表黄裏薄紫　月まて　又黄紅葉と

○紅葉狩　葡の生葉

○地楡　割木香

○川芎花

○黄芩の花　一名芩草　枯腸茎の長り

○岩菊の花　花黄

○橡の實　本名海石榴。義門又

八左の方言に椿を民木の実ともいへり　○橘の子　橘の法師　○乳

○柑子　柑の法師　○密柑　倍子九年母と書　○金柑　金橘と

○温州橘　其葉密柑に似て薄く味ひ甘くして美なり　○

佛手柑　実の形人の手の如き指あり　又白茎もあり　○枳殼　人

○榲桲　マルメロハ　○南天燭　蛮名ゼ

の子　○瞿麦子　桐の實　天竺桂の実あ

皂角子　の　○木蘭子　蘭ハ

ぶし倍ゴ実を
ツブといふより○菩提子 枝葉ゴ
似さり人その実をとりて念珠ゴつく
る倍ゴ鬼見愁と名づく鉄邪気を
除る○川楝の子 倍ゴこの茎と
とふ 楝と八大ゴ茎実 楝と云 栴檀
を金鈴子といふ ○桐油の實 実
大いこ油ゴとり用ゆその切荏の
油ゴ似さり本ゴ嬰子桐虎子桐と
いふこ ○椋の實 木八板の木ゴ似
まり て本ハ一種変生
故 ○槙櫃の實 高木あり茎木
ハ楓樹ゴ似てふぐく茎八裏
まび倍よんでカラボケと云 ○栂の
實 和名とつぶくとふ
黒色を染るものこ ○老母草
實 四時紫洞もその実あり故ゴ
万年青の名あり唐土ゴ瑞祝
ゴ必も用 ○落栗。球栗。焼栗。
ゆといふ ○栗。栗。栖栗。茅栗。
剥栗。打栗 栗子餅 茅栗を粉とな
餅ゴまぜる

もの 出落栗 此栗必ず殊を脱し
る て地ゴ落多故ゴ名つ
く倍丹波のそこもち栗とこそ
是をそうちく出落の浪なり 三度
栗 城後及び上下の野州ゴもちるもの
ハて尤小栗ゴ一年ゴ三度実の
る云 山栗 栗栗と
ひやうく栗とふ山栗の日 椈栗 水
さもものはて尖らざるもの
しそのの殼とる鞍馬の村
婦紫栗と称するもの是ゴ ○榛子
紫ゴ紫ゴ故ゴ
ハシバミといふこ ○櫟の子 櫟の実
悉く櫟ゴ似て分ちがく老ゴものの如
き毛のあるものハ櫟ゴ毛の
ごくさもの巨椎のごく玄て
食ふ又凶年ゴハ粉ゴて食ふ ○椎
○落椎。椎拾ふ椎ハ実の名こ木の
名ゴハあらず木の名ハ鉄櫟とふ ○
椎柴 ○椎の柴。椎の小枝。随ハ椎
椎柴といふ椎の木のこの木
ゴ成さ ○團栗 櫟の実 ○新胡桃
るもの

梾果 ○新櫃子 大木色木に生じ花しあり名まあ
とふ 牡とも牡ハ実
を結ぶと也 ○新松子 松ノさ ともふ
又松ノ子とも
ものよりていと ○水木子 喬木こ 梨梅也
どきのごとく茎葉に似て巻こ ○茱
梅也とさのごとく葉より生也
萸 山茱萸 ○食茱萸 ○呉茱萸 伊
紅色 ○榿藤 茎葉似て拔ノ巻
のるこ 通茱のごとし ○
榎の實 胡椒の大さ ちさくして味道
ちさくして食ふ ○
熟柿 烏柿 ○無
柿と干て製こ
花果 古名花ほこでものと ○鶏
ふ信ハ唐柿といふ
上戸 本名白英一名鬼目といふ俱白
英ハ花ハつきての名こ鬼目ハ
実をこの又ツクミイロ子とも
ひよりとり好んて此実を食ふと云 ○
仙蔡 本名珊瑚菓こいふ信ハからし
らぬるこいふ実ハ赤して

小さき珊瑚
珠のごとし ○漆の子 ○漆樹 ○漆ぬるで
ぶるも
同初こ ○色かへ松 ○破芭蕉
秋風ハ破るこ芭蕉のもろきこと
とふこて多く多ハ芭蕉より ○豆
引 小豆 緑豆引 一年ハ二度引 蕪
豆引 ○蕎麦刈 新蕎麦
そのまきもの八七月中旬むそ の実いま
ご終らぬ実花ハ熟ぬる 熟とえらこて
ハて是と蕨ぐこと
と彩 蕎麦こいこ ○草牡丹 紫
衣菊 ○貴布祢菊 ○加賀菊 ○繍紙
菊ハまて貴布祢菊こ
て学牡丹こいふ中ハ
イ菊こいふ牡丹ハ
佛甲草 信ハ岩連茎こいふ ○蒟
ひらきて実色
蒟花 紫毛ハ茎葉の毛ハ二スジ
イリ小て天南星ハ似ちり
月根を
掘る ○櫧の實 櫧ハ信ハこ
みの実ハ似さ

り稲ハ食ヒ〜搗ハ食をかちぐさ〜○
いちゐ〜毛あり搗ハ毛をけ〜さ
梅嫌子を結ん○野山の錦紅葉
で紅葉り
の紅○山粧ふ○薄ちる○未
枯○枯草の露○鯉魚風
九月の風をいふ○いろなき風こゝもに九月の風をくり
稲孫田千束生。孫稲。稲の苗
ゝ山見をおろ〜ふ〜こゝ生ぶるを
おりともゝ〜り遅根晩稲晩田
ゝ〜ゝ生ぶ〜
実のる稲○落水○露霜
露時雨○霜踏む鹿冬ふるつきを
法抄ハ
秋とも○尾越の鴨これハ暗餌
を食ふ〜ふく花こゝ〜ゝ生
少ゝ山の尾を越て来ると云○
紅葉鮒紅の稚ハ〜ゝ
赤〜ゝ〜ゝをいふと〜○